

「大セルジユク朝」と「ルーム・セルジユク朝」

井谷 鋼造

はじめに

ヒジラ暦730(西暦1329/30)年にペルシア語による歴史著作 *Tārīkh-i Guzīda* を完成させた Ḥamd Allāh Mustawfī Qazwīnī はその中のセルジユク朝¹⁾に関する部分の冒頭で次のように述べている。(()内はローマ字転写形, 【 】内は筆者の補足を示す)

セルジユク家(Saljūqiyyān)の帝王たちについて、三つの分枝(shu'ba)。

第1のものかまたは全イランを、またまたはその一部を【支配した。】【王の数は】14名。彼らの王権の期間は429(1037/8)年から590年のラビーウ I 月(1194.2.24-3.25)までの161年。

第2のものはキルマーンで、11名。彼らの王権の期間は433(1041/2)年から583(1187/8)年までの150年。

第3のものはルームで、15名。彼らの王権の期間は480(1087/8)年から700(1300/1)年までの220年。

イスラームの時代に興った国運(duwal)の所有者たちは皆が何らかの欠陥('ayb)で汚されていた。ウマイヤ家はザンダカ主義(zandaqa)とムアタズイラ派(i'tizāl)とハーリジー思想(khārijīyat), アッバース家の一部はムアタズイラ派, Layth 家【サッフアール朝のこと】とブワイフ家は異端(rafīd), ガズナ朝(Ghaznawīyān), ホラズムシャーフ朝(Khūwārazmshāhiyān), サルグル朝(Salghuriyān)は出自の卑しさによって。ところが、セルジユク朝はこれらの欠陥から免れ、スンニーで、清浄な信仰を持ち、善行を行い、臣民に優しくした。このバラカにより、彼らの国運においては彼らを揺るがせる反乱者が現れることもなかった。[TG: 425-6]

言うまでもなくセルジユク朝はトゥルク系のオグズまたはトゥルクマーン²⁾と呼ばれた人々の建てた国家であるが、イスラーム史におけるこの国家の顕著な特徴は、この王朝に属する一族がマムルークあるいはグラームと呼ばれた奴隷出身ではない、純粋なトゥルク系遊牧民(それも支配者層に属する)出身であったことで、その辺の事情を Ḥamd Allāh Mustawfī はマムルーク出身のガズナ朝(977-1186), ホラズムシャーフ朝(c. 1077-1231), ファールス地方のサルグル朝(1148-1270)³⁾の「出自の卑しさ」(ḥaqārat-i gawhar)と対比して、的確に述べている。それと合わせてムスタウフィーはセルジユク家に3つの分枝があったことを述べており、それぞれの統治期間も上の記述により、明らかである。さて、ここで注意を向けてよいのは現代のトルコ共和国を初め、欧米、ロシア、そして我国の歴史研究者が「大セルジユク朝」と呼び習わしている名称が上で挙げた記述の中には現れていないことである。つまり、「大セルジユク朝」とは決してこの王朝の自称でもまた後世の歴史家による他称でもなく、初代のスルターン Ṭughril bik が429(1038)年にホラーサーン地方のニーシャープールで即位した時点から、552

(1157)年にスルターン Sanjar が同じくホラーサーンのマルウで他界するまでの、イランとイラクを中心としたセルジुक朝政権を呼ぶ便宜的な名称にすぎない⁴⁾。

一方「ルーム・セルジुक朝」も歴史資料に現れる名称ではなく、王朝の存在した当時の呼称は「ルームのセルジुक朝」、「ルーム・サルタナト」、「ルームのスルターンたち」等であり、筆者自身、この王朝の政治史を扱った一連の論考の中では「ルーム・サルタナト」の名称を採用してきた。今回敢えて「ルーム・セルジुक朝」の名称を用いたのは、特に「大セルジुक朝」と呼び習わされる王朝と「ルーム・セルジुक朝」と呼ばれる王朝の相互関係がいかなるものであったのかを歴史文献資料のうちに探求し、セルジुक朝時代史のうちにこの2つのセルジुक朝の立場を位置付けてみたいと考えたからである。

具体的に本稿ではルームのスルターンたち、すなわち「ルーム・セルジुक朝」の祖先たちがセルジुक家集団あるいはその後の「大セルジुक朝」の内部で、いかなる立場にあり、いかなる活動をしていたかを史料の記述から明らかにすることに努め、その結果として「大セルジुक朝」と「ルーム・セルジुक朝」の相互関係がいかなるものであったのかを提示してみたいと思う。以下で取り上げるルームのスルターンたちの祖先とはセルジुक朝の名祖 Saljūq の息子 Isrā'īl, 別名 Arslān Yabghū⁵⁾, その子 Qutalmish⁶⁾, その子 Sulaymān, その子 Qilich Arslān の4名のことである。

本稿で用いた文献資料について手短かに述べておくと、それらは使用言語によってペルシア語文献とアラビア語文献に二大別することができる。文献の書かれた時期は西暦11～14世紀にわたっており、大まかな特徴を言えば、アラビア語文献(作品の著作年代順に、al-'Aẓīmī⁷⁾, Ibn al-Azraq al-Fāriqī⁸⁾, al-Ḥusaynī⁹⁾, al-Bundārī¹⁰⁾, Ibn al-Athīr¹¹⁾, Ibn al-'Adīm¹²⁾, Sibṭ ibn al-Jawzī¹³⁾らの歴史に関する著作)は総じて地域史に根ざし、同時代の証言に基づく史料価値の高いと考えられるものが多く、一方ペルシア語文献(Gardīzī¹⁴⁾, Rāwandī, Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh¹⁵⁾, Ḥamd Allāh Mustawfī¹⁶⁾, Shabānkārā'ī¹⁷⁾, Aqsarā'ī¹⁸⁾, らの著作)は Gardīzī を除いて後世の作品が多く、ある一定の(例えば王朝の名誉や権威を擁護するための)史観に貫かれた、後に詳しく述べる予定の Rāwandī の *Rāhat al-Sudūr wa Āyat al-Surūr* のようなものもあり、事実関係を明らかにするという意味での信頼性の点でアラビア語の年代記などと必ずしも同列に扱えないものもある。つまり、それぞれの文献にはそれが書かれた固有の背景があり、アラビア語文献の中では al-Ḥusaynī と al-Bundārī, ペルシア語文献では Rāwandī, Aqsarā'ī らは王朝の名誉を賛美し、権威を擁護する立場からその著作を行ったと考えられる。

I. ルームのスルターンたちの祖先と「大セルジुक朝」

1. Isrā'īl(Arslān) b. Saljūq

セルジुक朝の初期, より正確にはセルジुक朝を形成するセルジुक家の集団が勃興した頃の彼らの歴史については正確な記録と思われるものが少ない。ここで取り上げようと思う Isrā'īl についても余り多くの記録がないのであるが, そのうちでもこの人物の事蹟に関し

て僅かでも記録を残しているのはアラビア語文献では, al-Ḥusaynī, al-Bundārī, Ibn al-Athīr, Ibn al-'Adīm, ペルシア語文献では, Gardīzī, Rāwandī, Rashīd al-Dīn, Ḥamd Allāh Mustawfī, Shabānkārā'ī, Aqsarā'ī などである。それらによると, Isrā'īl は別名の Arslān で知られ, その名前で史料の記録に登場することが多い。

西暦13世紀にシャームのハラブ周辺の地誌とハラブに関わった人物の膨大な伝記集を著した Ibn al-'Adīm の BT 中のセルジューク朝スルターン Alp Arslān の項目には, Alp Arslān のために書かれた, 現存しない *Malik-Nāma* の記述が参照されており, それは当時のセルジューク族の最年長者で, 一族の系譜を最もよく知るアミール Īnānj-bik の語ったところに基づくものであるという。以下にその記事を訳出してみる。

アミール Saljūq b. Duqāq はハザル(Khazar)¹⁹⁾のトゥルクの有力者(a'yān)のひとりであった。Duqāq は“Tamur Yāligh”つまり「強弓」(shadīd al-qaws)という意味のラカブを与えられた。時経てアミール Duqāq には祝福された子供が生まれ, 彼は Saljūq と名付けられ, “Subāshī”というラカブが与えられた。その意味は「軍の頭目」(muqaddam al-jaysh)である²⁰⁾。Saljuq には4人の子がいた。Mikā'il, Mūsā, “Yabghū Kalān”というラカブの Arslān, もう1人は若くして死んだ。アミール Mikā'il b. Saljūq には2人の子がいた。Ṭughril bik と Dāwud Chaghri bik である。[BT : 32/ IV 552]

この中で Arslān は Saljūq の4人の息子のうちの一人とされ, Arslān (Isrā'īl), Mikā'il, Mūsā という3人の名前については Ibn al-Athīr [KT : IX 474] や al-Ḥusaynī [ADS : 2/2 a] の記録も一致している。この3人のうちいずれが長子であったのかについては Rāwandī [RS : 87, 460] と Shabānkārā'ī [MA : 97/192 r] は Isrā'īl が長子であったとしているが, 他の史料には明記されていない。

Saljūq の4子のうち上にも名の挙がっていて後に「大セルジューク朝」国家の建設者となる Ṭughril bik, Chaghri bik 兄弟の父 Mikā'il については殆どその事蹟が伝えられていないのに対して²¹⁾ Isrā'īl (Arslān) についてはいくつかの記録がある。Ibn al-Athīr [KT : IX 474] によれば, サーマン朝が, 強大化するカラハン朝の王 Hārūn b. Īlik al-Khān に対抗して Saljūq に援助を求めた際 Saljūq は息子 Arslān を送って援助し, 彼らの援助でサーマン朝は Hārūn に対して優位に立ち, Hārūn が奪った領土を取り戻した後 Arslān は父 Saljūq の許へ帰ったという。この記録に現れる Hārūn とは Ibn al-Athīr が別の箇所です [KT : IX 98-100] Bughrā Khān al-Turkī Shihāb al-Dawla Hārūn b. Sulaymān Īlik としてその名を挙げている「Kāshghar と Balāsāghūn から al-Ṣīn の境界までの支配者」のことで, この人物は383 (993/4) 年, 当時のサーマン朝の君主 al-Amīr al-Raḍī Nūḥ b. Maṣṣūr に反乱し, ホラーサーンにいた Fā'iq と Abū 'Alī Sīmjūrī のそそのかしで一時サーマン朝の首都ブハーラーを占領したのである。Bughrā Khān はその後重病に患りブハーラーを撤退して没するが, 撤退の際町の人々と共にグッズのトゥルク人 (al-Atrāk al-Ghuzzīya) が Bughrā Khān の殿軍を襲い, 彼らを殺し, 略奪を行ったという。グッズのトゥルク人はオグズ族の人々ということで, Ibn al-Athīr の2つの記事を合わせて考えると, 第2の記事に Arslān の名は現れないものの, 明らかに2つの記事

は同じ事件に言及しているものと考えられ、ここでは恐らくサーマーン朝の支援に送られた Arslān 麾下のセルジューク家集団(オグズ=トゥルクマーン族の Qiniq 部族出身²⁹⁾)のことを指しているのであろう。

さらにその後の Arslān の行動に関して Ibn al-Athīr は相互に関連する 2 つの記録を残している。その一つは次のようなものである。

Saljūq には Arslān, Mikā'il, Mūsā という子がいた。Saljūq は Jand で 107 歳で没し、そこに葬られた。残った子のうち Mikā'il は異教徒のトゥルク人の領土へ聖戦 (ghazā) して自ら戦い、アッラーフの道に殉教した。彼の後には Bayghū, Ṭughril bik Muḥammad, Chaghri bik Dāwud が残された。彼らの部衆 ('ashā'ir) は彼らに従い、彼らの命令と禁令を一致して守り、Bukhārā から 20 ファルサフのところに宿営した。Bukhārā のアミールは彼らを恐れ、彼らへの庇護 (jiwār) を害し、彼らを攻撃して絶滅しようとした。彼らは Turkistān の王 Bughrā Khān の許へ避難した。…(中略)…サーマーン (Sāmāni) 家の国運が衰亡し、Īlik al-Khān が Bukhārā の主となると、Dāwud と Ṭughril bik の叔父 Arslān b. Saljuq の立場が Mā warā' al-Nahr で強大となった。'Alī tikīn は Arslān Khān に捕らえられていたが、逃亡した。彼は Īlik al-Khān の兄弟であり、Bukhārā へ着いてその主となった。彼は Arslān b. Saljūq と同盟し、二人は強力になり、恐るべきものとなった。Arslān Khān の兄弟 Īlik は彼ら二人に挑戦したが二人は彼を破り、Bukhārā に留まった。'Alī tikīn は Yamīn al-Dawla Maḥmūd b. Sabaktikīn【ガズナ朝のスルターン、Maḥmūd】の領域に隣接する所で度々彼に反抗し、彼の使者がトゥルクの諸王に向かうことを妨げた。既述のように Maḥmūd が Jayḥūn を渡ると 'Alī tikīn は Bukhārā から逃亡した。

Arslān b. Saljūq とその集団は Maḥmūd から避難して砂漠 (al-mafāza wa al-raml) に入った。Maḥmūd は Saljūq 家の兵力、彼らの勢力や数の多さを知ると Arslān b. Saljūq に手紙を書いて彼を懐柔し、望みをもたせた。彼が来ると Yamīn al-Dawla は即座に彼を捕らえ、猶予を与えず、ある城塞に投獄した。彼の幕営 (khargāhāt) を略奪し、彼の部衆について行うことを諮問した。Maḥmūd の側近中の有力者の一人、Arslān al-Jādhīb が、矢を射られないよう彼らの親指を切り取るか、Jayḥūn に沈めて溺死させることを提案し、言った。「汝は残忍な心にならなければならない」と。Maḥmūd は彼らに命じ、彼らは Jayḥūn を渡り、Khurāsān の諸地域に分散させられた。彼らにはハラージュが課せられ、徴税人 ('ummāl) が彼らを圧迫し、財産や子供にも彼らの手が伸びた。彼らのうち 2000 人以上が離れて Kirmān へ行き、そこからさらに Iṣbahān へ行った。彼らとそこの支配者 'Alā' al-Dawla b. Kākwayh との間に既述のように戦いが起こり、彼らは Iṣbahān から Adharbāyjan へ行った。彼らは Arslān の集団である。

[KT : IX 474-6]

これと同じ内容の記事が別の箇所にも出てくるが、それは

420 (1029/30) 年 Yamīn al-Dawla は al-Ghuzziya のトゥルク人を攻撃し、彼らを領内に分散させた。彼らはそこで悪事を働いていたのである。彼らは Arslān b. Saljūq の仲間 (aṣḥāb) であり、Bukhārā の砂漠にいた。Yamīn al-Dawla が Bukhārā の方へ渡河すると、その主 'Alī tikīn は後述のように逃亡した。Arslān b. Saljūq は Yamīn al-Dawla の許へ出頭し、捕らえられて al-Hind の地域に投獄された。【Maḥmūd は】彼の幕営へ夜行して彼の仲間を多く殺したが、助かった人々も多く、彼らは逃亡して

Khurāsān に着き、この年そこで悪行をなし、略奪を行った。【Maḥmūd は】彼らに対して一軍を送り、彼らを Khurāsān から駆逐した。[KT : IX 377-8]

というものである。Ibn al-Athīr がここで述べている Arslān b. Saljūq の「仲間たち」はその後、イランの各地を荒し回った後アザルバイジャンやディヤール・バクルに入り、435年ラジャブ月25日(1044.2.27)には実力でマウスイルに入り、同年ラマダーン月20日(4.21)ウカイル朝の Qirwāsh 率いるアラブ軍に敗れ去ったイラーキーヤ(al-'Irāqīya)として知られるトゥルクマーン集団のことである。Ibn al-Athīr はむしろこの集団の動向について詳しい記録を残している [KT : IX 378-91]。

さて、以上に訳出・引用した Ibn al-Athīr の記録から Isrā'īl については、次のようなことがまとめられよう。

- 1) 父 Saljūq の在世中、383年にブハーラーを一時占領したカラハン朝の Bughrā Khān に対抗してサーマーン朝支援に派遣された。
- 2) サーマーン朝の滅亡(389(999)年)後 Isrā'īl はカラハン朝の一員で、ブハーラーの支配者 'Alī tikīn と結び勢力を伸長させた。
- 3) ガズナ朝の Maḥmūd が 'Alī tikīn を攻めるため、ジャイフーンを渡河してマーワラーアンナフルに入ると Maḥmūd は Isrā'īl を捕らえ、ヒンド地方の城塞に投獄し、彼の率いていた部衆はホラーサーン地方に分散させられた。420年 Maḥmūd はこの部衆をホラーサーンより追放し、やがてかれらはイランの各地を転々とし、イラーキーヤ集団と呼ばれるようになった。Ibn al-Athīr の記事によれば、Arslān が率いていたトゥルクマーン集団は Mikā'il の2子、Ṭuḡhril bik と Chaghrī bik の率いる集団とは別個に独立した行動を取っているのでセルジューク家集団には西暦11世紀の初頭 Isrā'īl (Arslān)率いるものと Mikā'il の2子が率いるものと2流があったと考えてよい。

上述の Ibn al-Athīr の記事を補足するような内容が Gardīzi によって伝えられている。それによればガズナのスルターン Maḥmūd がマーワラーアンナフルで Yūsuf Qādir Khān と対面した416(1025/6)年に

'Alī tigīn は知らせを受けると逃亡し、荒野(biyābān)に入った。アミール Maḥmūd は Alī tigīn のために偵察員(ṣāhib-i khabar)を任命した。その後 Isrā'īl b. Saljūq がある場所に隠れたという知らせがもたらされ、Yamīn al-Dawla は人を送り、彼をそこから連れ出させ、Ghaznīn へ送った。そこからさらに Hindūstān へ送り、治世の終わりまでそこに止められた。[ZA / H : 410; ZA / N : 84]

これによって Maḥmūd が Isrā'īl を捕らえたのは416年のことであったと分かる。さて、Maḥmūd が Isrā'īl を捕らえた理由については Maḥmūd が Isrā'īl 配下のトゥルク系集団の軍事力を恐れたためであるとされるのであるが、この点で Rāwandī, Rashīd al-Dīn, Ḥamd Allāh Mustawfī, Shabānkāra'ī, Aqsarā'ī のペルシア語文献はほぼ同じ内容の逸話を収録している。その逸話によれば Isrā'īl はガズナ朝の Maḥmūd に対して自らの持つ一張りの弓と3本の矢によって10万騎の援兵を動員する約束をしたという◀援兵の総数は RS では35万騎、TG では

15万騎, MA, JT では40万騎, MAA では6万騎》。これらの数字には明らかに誇張があり, それを収録する Rāwandī, Aqsarā'ī はセルジुक朝側に立って著作された文献であるから, この逸話のような状況は現実とは考えにくい⁵, Isrā'īl 配下のセルジुक集団についてその強大な勢力を印象づけようとする逸話が存在していたことは事実であり, 上述の6つの文献ともセルジुक集団の強盛ぶりを恐れた Maḥmūd が Isrā'īl を捕らえさせヒンドウースターンの Mūltān の境域にある, Kālinjar 要塞へ彼を送って監禁したことでは一致している [RS : 90, JT : 9, TG : 427, MA : 59/177 r, MAA : 13/ Y 73]。

その後の Isrā'īl の状況を, 最も詳しい記録を残している Aqsarā'ī の記事を中心にまとめてみると; 彼は7年間の監禁生活を送り, 421 (1030) 年の Maḥmūd の死後その2子 Muḥammad と Mas'ūd の間で後継者争いが生じたことを利用してセルジुक朝側では Isrā'īl の奪回を計り, Isrā'īl も一度は脱出に成功するがやがて追手に発見されて連れ戻され, 最後は Mas'ūd の命令で毒殺されたという。アラビア語の文献で唯一 Isrā'īl の末路について言及する Ibn al-Athīr によれば, Ṭughril bik, Chaghri bik 配下のセルジुक集団の勢力が強まると, 彼らは叔父 Arslān の解放を Mas'ūd に求め, Mas'ūd もこれを認めて Arslān を自らのいたバルフへ呼び, 彼に甥である Ṭughril bik らに悪行を止めるよう使者を送るように命じた。Arslān はこれに応じて彼らに使者を送ったが, その際使者に一本の錐 (ashfā) を持たせてそれを彼らに渡すように命じた。使者が用件を伝え, その錐を渡すと彼らは気分を害し, 嫌悪してかつての略奪と悪行へと戻った。そこで Mas'ūd は Arslān を獄へ戻し, ガズナへ去ったという [KT : IX 479]。ここで話の要点となる「錐」が当時どのような意味を持ったのかは Ibn al-Athīr も全く説明をしておらず不明であるが, Ṭughril bik, Chaghri bik 兄弟が必ずしも全面的に彼らの叔父 Arslān の解放を待望していたのではないことがこの記事から窺われる。上でも述べたように当時のセルジुक集団は二つに分かれており, しかもそのうちの一つはその指導者 Isrā'īl (Arslān) が長くガズナ朝の獄中にあったので, もう一方の集団の指導者 Ṭughril bik, Chaghri bik らはこの機会にセルジुक集団全体の主導を把握しようと試みていたのかもしれない。Isrā'īl の没年は諸史料に明記されていないが, Gardīzī の伝える416年の逮捕から, Rashīd al-Dīn らの語るように7年間獄に繋がれた後のことであつたとすれば, 423年頃のことと推定される。JT の伝えるところによれば, 追手が迫り, 自らが再び捕らわれの身となることが免れないと悟った Isrā'īl は同行のトゥルクマーンたちに次のように言つたとされる。

私のことは諦めよ。私の兄弟たちに私から挨拶を伝えよ。そして次のように言え。Khurāsān の王権 (mulk) を求めることに一層努めよと。この帝王【Maḥmūd】は奴隷の子供 (banda-zāda) で, 偉大な系譜を持たない。この王国 (mamlakat) は彼のものではありません。【彼の王国が】汝らの手に落ちるように努めよ。彼は私を確たる罪もなく監禁した。 [JT : 10-1]

ここには Isrā'īl の, 自らの逮捕と投獄を指令したガズナ朝の Maḥmūd に対する復讐がセルジुक一族によってなされることへの期待がこめられているが, Shabānkāra'ī によれば,

スルターン Maḥmūd の子孫の災難, Khurāsān の王権が彼らの手から失われること, 王国が Saljūqiyān

の手に落ちること、これら全ての原因はこの Yabghū [Arslān] の逮捕にあった。彼には Mā warā' al-Nahr に兄弟やその子供たちがおり、全てトゥルクマーン (Tarākima) の偉大なアミールたちであった。彼は彼らに毎日知らせを送って言っていた。「王権を求めることを止めることがないように注意せよ。

この王国は必ずや汝らのものとなろう。」[MA : 59-60/177 r]

として Isrā'īl の逮捕と監禁がガズナ朝のホラーサーン喪失につながる原因となったとされる。事実、叔父 Isrā'īl の監禁も一つの口実として Ṭughril bik, Chaghri bik 配下のセルジューク集団は当時のホラーサーンの支配者ガズナ朝への攻勢を強め、マルウ、ニーシャープール ≪429年ラマダーン月 (1038.6.7-7.6) Chaghri bik が無血占領した。この時点から「大セルジューク朝」が始まったのである。≫等のガズナ朝支配下の都市を次々に攻略し、431年ラマダーン月 8 日 (1040.5.23) にはマルウ近郊の Dandānaqān²³⁾ でスルターン Mas'ūd の率いるガズナ朝軍を大破してホラーサーンの覇者となり、「大セルジューク朝」を建設してゆくのである。

2. Qutalmish b. Isrā'īl

Qutalmish (Qutalmish) の名前は父 Isrā'īl がガズナの Maḥmūd によって捕らえられた際に父と同行していた者として Rashīd al-Dīn や Aqsarā'ī に挙げられている。Aqsarā'ī によれば Isrā'īl の死後 Ṭughril bik はスルターン Mas'ūd に Qutalmish の解放を要請し、彼は解放されて Ṭughril bik の許へ来て大いに慰撫されたという [MAA : 14-5/ Y 74]。彼の名前はその後 426 (1034/5) 年にマーワラーアンナフルからホラーサーンへと渡河したセルジューク家のアミールたちの一人として Chaghri bik Dāwud や Ṭughril bik Muḥammad らと並んで al-Ḥusaynī により言及されている [ADS : 194/110 a]。この頃の Qutalmish は父 Isrā'īl がそうであったように Mikā'il の二人の息子とは別個で独立した勢力を有していた訳ではなく、Ṭughril bik らに従属するセルジューク族のアミールとしての存在に甘んじていたようである。

その後 Qutalmish の名前が登場するのは Ṭughril bik による西方遠征が本格化し始めた時期で、まず al-Ḥusaynī は 430 (1038/9) 年に Shihāb al-Dawla Qutalmish b. Isrā'īl b. Saljūq がスルターン Ṭughril bik によりアルメニアとアザルバイジャンへ送られたことを記し [ADS : 17/11 a] 続いて al-'Aẓīmī は 437 (1045/6) 年に Qutalmish が Dabil でルーム人 ≪ビザンツ帝国の臣民≫ を破ったこと、439 (1047/8) 年には Janza の町を 1 年半に亘って包囲したが結局敗退したこと、445 (1053/4) 年にはカルス (al-Qars) の町を襲ってそこにいた全ての者を殺したことを記録している [TA : 5, 6, 10]。ここに見える Dabil (Dvin), Janza (Ganja), al-Qars はいずれもアルメニアの地名であり、437-45年の時期に Qutalmish がアルメニア周辺で活動していたことは確かである。トルコ共和国の M. Fuad Köprülü によって紹介された「ルーム・セルジューク朝」に関する現存の最も古い文献史料である、ペルシア語の韻文で著された *Anīs al-Qulūb* (608 (1211/2) 年完成) の著者カーデーイー Burhān al-Dīn Abū Naṣr b. Mas'ūd Anawī はアルメニアのアニ (Ani) の出身であるが、この作品の中では Qutalmish がアニとカルスへ来てカルスを取ったことが記されている [AQ : 502]。さらにウルファ ≪アラビア語で Ruhā, 十字軍時代の Edessa≫ 生まれの Mateos²⁴⁾ がアルメニア語で著した記録によれば「アルメニア暦 498

(1049/50)年に Apreem (Ibrāhīm) と Kitilmish (Qutalmish) という名の二人の軍司令官が大軍を率いてアルメニアに進軍した」とされている [VN : 85-6] ので Qutalmish の西暦1050年前後のアルメニア方面での活動については疑問の余地がない。al-'Azīmī はこの時期の Qutalmish を Ṭughril bik の「グラーム」(ghulām=若者, 奴隸)あるいは「サーヒブ」(ṣāhib=仲間, 味方)と呼んでいるが、これも上で記したのと同様に Qutalmish の Ṭughril bik に対する従属的な立場を表現したものである。

さてスルターン、Ṭughril bik は447年ラマダーン月25日 (1055.1.17) にアッバース朝のハリーフア al-Qā'im bi-amr Allāh の要請でバグダードに入城するが、その後ファーティマ朝の支援を受けたトルコ系軍事奴隸出身の有力者 Arslan al-Basāsīrī との対立が激化してゆく。Qutalmish の名前が次に登場するのはセルジुक朝の対 al-Basāsīrī 作戦においてであり、Sibt ibn al-Jawzī が以下に述べる諸事件に関してアラビア語で詳しい記録を残している。Sibt ibn al-Jawzī 自身は645年ズルヒッジャ月21日 (1257.1.9) デイマシクで没した西暦13世紀の歴史家であるが、彼の主著 MZ の448 (1056/7) 年から480 (1087/8) 年までの部分には随所に Ghars al-Ni'ma として知られる Abū al-Ḥasan Muḥammad b. Hilāl al-Ṣābī ≪480年ズルカアダ月 (1088.1.28-2.26) バグダードで没≫の現存しない、歴史に関する著作が引用されており²⁹⁾、その記録の信憑性は高い。MZ によれば448年ジュマダー II 月17日 (1056.9.1) スルターン Ṭughril bik の軍がバグダードのディジラ河東岸の al-Shammāsīya 地区に現れたが、その指揮を執ったのは Abū al-Fawāris Qutalmish であった。その後この軍はディジラ上流のウクバラ (Ukbarā) へ移動し、Ṭughril bik のワズィールであった 'Amīd al-Mulk は事態が明らかになるまでウクバラに留まるようクタルムシュに申し送ったという。ここで言う事態とはマウシルの主、アラブのウカイル朝の Quraysh b. Badrān al-'Uqaylī とディジラ下流域に勢力を持つ同じくアラブのマズヤド家 (Banū Mazyad) の Dubays b. Ṣadaqa が al-Basāsīrī と結託しているのではないかとセルジुक朝側が疑念を抱いていたことを示している。その後 Qutalmish はスルターンの大ハージブと共に2000騎の「トゥルクとグズとトゥルクマーン」を率いてマウシルまで遡上し、al-Basāsīrī と戦うことを命じられ、同年ズルカアダ月1日 (1057.1.10) にマウシル西方のシンジャール (Sinjār) で al-Basāsīrī 軍と戦った。この戦いで前述のウカイル朝の Quraysh は Qutalmish 側に立っていたのだが、al-Basāsīrī 側についたマズヤド家の Dubays らが Quraysh 配下のウカイル朝軍を事前工作で切り崩し、Quraysh を孤立させたので、Qutalmish 軍は敗北し、大ハージブは殺され、Qutalmish は逃亡した。al-Basāsīrī は多くの戦利品を得て、2200の首級をミスルのファーティマ朝の許へ送付したという [MZ : 9-12]。Qutalmish の事蹟のうちシンジャールの敗戦は Sibt ibn al-Jawzī の他に al-Bundārī [TDS : 14], Ibn al-Athīr [KT : IX 625], Ḥamd Allāh Mustawfī [TG : 352] にもごく簡潔に記録されている。

対 al-Basāsīrī 作戦に投入された Qutalmish は結局 al-Basāsīrī 軍に大敗したが、そのため特に咎めを受けることもなく、449年ズルカアダ月25日 (1058.1.23) にスルターン Ṭughril bik が

ハリーフア al-Qā'im に拝謁した際には同行の王子 (awlād al-mulūk) の一人としてブワイフ家の Abū Kālījār の二人の息子 Abū 'Alī と Abū Ṭālib Kāmūrā と共に Qutalmish の名が挙げられている [MZ : 25]。ここまでの Qutalmish の行動の記録はセルジューク朝の 1 王子または部将としての事蹟を伝えるもので、彼はスルターン Ṭuḡhril bik やそのワズィール 'Amīd al-Mulk の指図に忠実に従っていたようである。ところがこの後の Qutalmish の行動は一転してスルターン Ṭuḡhril bik に反抗するものとなり、スルターン自身による討伐すら受けるような状況となる。そのような状況がいかなる理由で生じたのかは史料の中に全く記録がないが、MZ の記事をもとに事態の推移を追ってみよう。

453年のラビウⅡ月(1061.4.25-5.23)にスルターンṬuḡhril bik は従兄弟 Qutalmish の立て籠もるダームガーン西方の Girdkūh に軍隊を動員したが、トゥルクマーンやトゥルクが Qutalmish 側に付いてスルターンの軍と戦い、それを破ったという [MZ : 77]。この時点で Qutalmish はスルターンṬuḡhril bik に反抗する態度を鮮明にさせており、この反抗は Ṭuḡhril bik の死去するまで続くのである。それまでスルターンに服従していた Qutalmish が何故反抗的な態度を取り始めたのかは前述のように全くその説明が見当たらないのであるが、当時の時代状況からある程度の推測を行うことは可能である。筆者の推測では、Qutalmish のスルターンṬuḡhril bik に対する反抗には450(1058)年の Ibrāhīm Yināl の反乱が大きな影響を与えているように思われる。この反乱については清水宏祐氏の先駆的ですがすぐれた論文[清水1975:15-32]があり、そこでは「大セルジューク朝」初期の、清水氏によれば Ṭuḡhril bik の従兄弟、Ibrāhīm Yināl 配下のトゥルクマーン集団の動向が明らかにされているが、この Ibrāhīm Yināl もまた前述の al-Basāsīri の反乱鎮圧に動員され、その過程で Ṭuḡhril bik に反旗を翻し、結果的に al-Basāsīri の反乱鎮圧を遅らせただけでなく Ibrāhīm Yināl 側についたトゥルクマーン集団にも多数の犠牲者を出した事件であった。Ibrāhīm Yināl のスルターンṬuḡhril bik に対する反抗とその最終的な敗北《Ṭuḡhril bik がホラーサーンに残った Chaghri bik の子供たちの支援を受けたことによる》を目の当たりにして Qutalmish は Ṭuḡhril bik のセルジューク族に対する権威が決して絶対的なものでないことを再認識したであろうし、Ṭuḡhril bik の最終的な軍事力の拠り所がホラーサーンを押さえる兄弟 Chaghri bik とその子供たちにあることを再確認した。そして Qutalmish もまた Ibrāhīm Yināl と同様に生来無政府的な無秩序を好み、都市部の略奪を切望するトゥルクマーン集団の軍事力に依存してセルジューク家の当時の代表者Ṭuḡhril bik の権威に挑戦するべく、難攻不落の要塞 Girdkūh に拠って、イラク以西の Ṭuḡhril bik とホラーサーン以東の Chaghri bik という二つの Mikā'il 系セルジューク家集団を分断しようと企てたのではなかったか。仮にこのような考えに基づいて反乱を起こしたとすれば Girdkūh という籠城地は正に最適の立地条件を備えていた。この要塞は後にイスマーイル派(ニザール派)「暗殺者教団」の拠点の一つとなり、モンゴル軍による猛攻の前にも容易に陥落しなかった要害の地である [本田1991 : 170, 179]。

その後の Qutalmish の動向を Sibṭ ibn al-Jawzī の記録から探ってみよう。453年スルターン

Ṭuḡhril bik は Qutalmish に対抗して、寵愛のグラーム Khumār tikīn al-Ṭuḡhrā'ī をライに送り、自らもハマダーンからライへ乗り込んで、Qutalmish を Girdkūh に包囲すべく出陣したが、同年シャアバーン月12日(1061.9.1) Khumār tikīn がスルターンの陣から逃亡した [MZ : 82, 84-5]。続いて455(1063)年の項に Sibṭ ibn al-Jawzī は次のような記事を残している。

ジュマーダー II 月(1063.6.1-29)に東方からの手紙が届いた。それによれば、'Amīd al-Mulk がスルターンの従兄弟 Qutalmish を包囲するため al-Ray から Kirdkūh へ向かったという。彼【Qutalmish】は部下 (al-ḥashaw) と歩兵以外に 1 万の戦士 (muqātil) を率いてその地区に住んでおり、その要塞は大変堅固で食糧や水が尽きない限り到達できない。そこには井戸はないが、水槽に集まった雨水を飲んでおり、それが尽きれば降伏するが、さもなければそこに至る道はない。和平について話が始まったが、彼【Qutalmish】は次のような条件で開城に応じた。その条件とは、1) スルターンの離婚 (talāq) にかけて彼に保護 (al-ḥifz wa al-ḥirāsa) を誓うこと。2) 彼の行為の罪を問わないこと。3) 彼がアミール Sulaymān [Chaghri bik の息子で、Ṭuḡhril bik の養子となり、後継者と定められた人物] の姉妹と結婚すること。4) 単独で名誉ある総督職 (wilāya) が与えられること。このうち【生命安全の】保証は取り決められた誓約を含めて与えられ、総督職もかなえられるが、結婚の取り決めと離婚にかけての誓いは誰がそれをスルターンに敢えて言うのかということになり、Qutalmish は言った。「彼らがスルターンに敢えてこのことを言わないのなら、私の心を和ませる保証もなしでどうして生命をお前たちに預けられようか」と。このため事態は頓挫した。 [MZ : 101]

ここには Qutalmish が籠城する Girdkūh の難攻不落ぶりが描かれると共に Qutalmish が何を要求してスルターンへの反抗を続けていたのかを端的に知ることができる。つまり Qutalmish は自らの生命と地位の保全を求め、自らが Ṭuḡhril bik の従兄弟であるという立場だけでなく、Ṭuḡhril bik との姻戚関係を積極的に求め、さらにセルジुक朝政権の領域内で独立した地方統治権を要求していたのである。Qutalmish が従来どの地方の支配権を持っていたかについてはアラビア語文献には記録がないが、Rāwandī を初めとするペルシア語文献では、Ṭuḡhril bik の西進にあたって Qutalmish がジュルジャーニ=グルガン (Jurjān=Gurgān) とダームガンとクーミス地方の一部へ送られたこと [RS : 104, JT : 20, MA : 98/192 v, UHS : 37-8/15 r]、さらにその後タバリスタンとマーザンダラーンの帝王位が与えられたこと [JT : 26, MAA : 15/Y 75] が記されている。これらの記録から Qutalmish の所領はハザル海南岸の東部、タバリスタンとマーザンダラーン、グルガンとアルブルズ山脈の東端を挟んだダームガン方面であったことが分かる。これらの地方はイラクとホラーサーンを繋ぐ、言い換えればイランの東西を結ぶ幹線路上の要衝にあたり、この地方に Qutalmish が配置されていたとすれば、それは Ṭuḡhril bik, Chaghri bik が主導するセルジुक朝内部において Qutalmish への信頼感の厚さを表していた。

455年ラマダーン月8日(1063.9.4)セルジुक朝初代のスルターン Ṭuḡhril bik が病没すると、セルジुक朝内部に大きな変化が現れた。周知の如く Ṭuḡhril bik には男子がなかったので、兄弟の Chaghri bik 死後その妻を Ṭuḡhril bik が娶っていた。遊牧民の間でよくみられる

levirate 婚が行われたのであるが、彼女には Sulaymān という息子がおり、この Sulaymān が Ṭughril bik によって後継者に指名されていた。そして Sulaymān は Ṭughril bik 没後ライで一度はスルターンに即位するのであるが、間もなく二人の競争者が前後して東方から現れた。一人は Sulaymān には兄に当たる、Chaghri bik の子、Alp Arslān ≪Ibn al-Athīr [KT : IX 476] によれば、420年ムハッラム月 1 日 (1029.1.20) の生まれ≫であり、彼はやがて第 2 代のスルターンとなった。もう一人が他ならぬ Qutalmish である。MZ によれば、Qutalmish は上述のようにこの年ジュマダー II 月から Girdkuh で Ṭughril bik のワズィール 'Amīd al-Mulk に包囲されていたが、Ṭughril bik の計報を聞くとワズィールは撤兵し、ライへと戻っていった。この機会に Qutalmish は Girdkuh を降り、トゥルクマーンを召集し、ライ南西の Sāwa へ赴いた。Qutalmish の兵力は 5 万騎に達し、そこからライ攻撃へ向かった。同じ頃ホラーサーンにあった Alp Arslān もニーシャープールを発進しライを目指していた²⁶⁾。ライにいた 'Amīd al-Mulk はこのように状況が緊迫化すると Sulaymān を見限り、Alp Arslān に救援を求めた。ズルカアダ月 21 日 (1063.11.15) には Qutalmish 軍がライに迫り、'Amīd al-Mulk はアミール Īnānj-bik を前衛とした軍を率いて町を出、Qutalmish 軍と会戦するが敗走した。その後 Alp Arslān の前衛ハージブ Ardam がダームガンに到着し、ズルカアダ月末日 (1063.11.24) Qutalmish は Alp Arslān 軍を迎え撃つべくライを去り、東方に進軍した。両軍は Qarya al-Milḥ という場所で衝突し、激戦が行われたが、Alp Arslān 側が勝利し、Qutalmish は敗走、兄弟の Rasūl tikīn、長子 Sulaymān 以下多数の有力者が捕虜となった。Qutalmish は戦場から逃亡して山間峡谷に分け入り、Alp Arslān 側の城塞の一つを通過したが、その城主に追跡され、馬を飛ばして逃げようとしたが、落馬して乗馬に踏まれ、吐血して死んだ。彼の遺骸はズルヒッジャ月 13 日 (1063.12.7) ライの町に運ばれたという。

以上の経過は専ら Sibṭ ibn al-Jawzī の記事 [MZ : 110-1] に拠ったのであるが、Qutalmish と Alp Arslān の対戦については al-Ḥusaynī も詳しい記事 [ADS : 30-32/18 a-19 a] を残しており、大略は MZ と一致している。さらに Ibn al-'Adīm [BT : 20/ IV 541], Ibn al-Athīr [KT : X 36-7], al-Bundāri [TDS : 30] のアラビア語文献にも Qutalmish の敗死は語られ、彼の死因が落馬によるものであったことは Rashīd al-Dīn [JT : 27-8], Ḥamd Allāh Mustawfī [TG : 430], Aqsarā'ī [MAA : 15-6/ Y 75, A 71] のペルシア語文献にも出てくる。これらのうち、Ibn al-'Adīm は会戦が Dih-i Namak として知られるダイア ≪私領地≫の近くで起こったとしており、Dih-i Namak とはペルシア語で「塩の村」の意味で、表現としては正に上掲のアラビア語の Qarya al-Milḥ に一致し、現在のイランの首都テヘラーンの東南東約 120km 程の所にこの地名は現存している。Rashīd al-Dīn と Aqsarā'ī は会戦の場所をホラーサーンの Isfarā'īn としており、それは誤りと考えられるが、Qutalmish が帝王権を求めて起った際に語ったという次のような言葉を収録している。

スルターンの地位は我々に帰するものである。我々の父は部衆 (qawm) の中の年長者 (mihtar) で、よりふさわしい者であったが、そのために殺されてしまった。 [JT : 28, MAA : 16/ Y 75, A 71]

筆者はこの言葉の中に Qutalmish の、本来父 Isrā'il (Arslān) に帰すべきスルターンの地位がガズナの Maḥmūd による監禁によって失われてしまった過去を想起し、Mikā'il の子、Ṭughril bik 死後の今こそスルターンの地位を本来それが伝えられるべき Isrā'il の子である自分の手に取り戻そうとする強い意志を見る。彼に先だって Ṭughril bik の在世中に反旗を翻した従兄弟の Ibrāhīm Yināl が Ṭughril bik の権威に挑戦したように Qutalmish もまた Ṭughril bik 没後の後継者決定に実力を以て名乗りを上げ、Ṭughril bik の兄弟 Chaghri bik 直系の、ホラーサーンの実力者 Alp Arslān とスルターンの地位を争ったのである。

最後に Qutalmish に従って Alp Arslān の軍隊と戦った者たちがどのような人々であったのかについて触れておく。Ibn al-'Adīm によれば、Dih-i Namak の会戦には Qutalmish 側 9 万に対して Alp Arslān 側 1 万 2 千という数字が記録されているが、Sibt ibn al-Jawzī は Qutalmish 側を 5 万のトゥルクマーンと述べている。al-Ḥusaynī は Qutalmish の配下に集まった集団を「ばらまかれた蝗のような軍隊のならず者 (awbāsh al-jund)」と呼び、Qutalmish が Alp Arslān との対戦を前に「ライの全ての村を破壊し、彼の軍隊のならず者たちの手を自由にした」と述べている [ADS : 31/18 a]。Sibt ibn al-Jawzī は Qutalmish が Girdkūh を降り、トゥルクマーンを募った際、あらゆる悪人 (muḥsid) が彼に注意を向けたこと、ライを包囲した 5 万のトゥルクマーンから成る Qutalmish 軍が私領地 (al-diyā') を略奪し、婦女をさらい、人々を殺害したこと、また 'Amīd al-Mulk の軍を破った後トゥルクマーンは「あらゆる醜悪で、嫌悪すべき」(qabīh wa munkar) 行いをしたことを語っている [MZ : 110-1]。これらの記録はトゥルクマーン集団に対する偏見を含んでいる部分があるとはいえ、Qutalmish 配下のトゥルクマーン軍がライ周辺の住民に決して歓迎される存在ではなかったことを示しており、都市周辺の略奪を事とするトルクマーン集団の特徴を如実に窺わせるものといえる。

3. Sulaymān b. Qutalmish

前述のように Qutalmish と Alp Arslān の戦いで Qutalmish の長子 Sulaymān は父の敗戦後捕らえられたとされるが、その後の処遇について Rashīd al-Dīn は次のように述べている。

Alp Arslān は彼【Qutalmish】の親族や従者を全て殺そうと考えた。彼の息子 Sulaymānshāh は幼かったが、殺すように命じた。ワズィールの Nizām al-Mulk は是認せず言った。「親族を殺すのは誤りであり、不吉なことである。」Alp Arslān はイスラームの前線地帯 (thughūr) に彼らが留まるよう彼らを王国の辺境へと送った。そして【スルターンに対して】遜り、惨めな気持ちを抱くよう彼らのアミールやマリクとしての地位の慣習を廃した。その後 Diyār Bakr と Ruhā を【彼らの所領と】定めた。

Sulaymānshāh はルームのスルターンたちの先祖である。[T : 28]

ほぼ同じ内容が Aqsarā'i [MAA : 16/ Y 75, A 71] によっても伝えられているが、それらによると Qutalmish の息子 Sulaymān (または Sulaymānshāh) ≪shāh の付いた形はアラビア語文献には現れないので、以下 Sulaymān と呼ぶ≫ は Alp Arslān によって命を奪われるところ、ワズィールの Nizām al-Mulk の諫言によって救われた。但し父 Qutalmish が所持していたマリク ≪セルジューク朝のスルターンの一族に与えられた王の称号≫ としての諸特権は剝奪され、

単にスルターンの臣下としてイスラームの前線地帯で生きる道が残されていたにすぎない。この後の Sulaymān の動静は465年ラビーウI月10日(1072.11.24)マーワラーアンナフル遠征中の Alp Arslān が不慮の死を遂げた後まで明らかではない。次に Sulaymān の名が現れるのは Alp Arslān を継いで、「大セルジューク朝」の絶頂期を現出せしめたスルターン Malikshāh の時代である。これに先立つ Alp Arslān 時代、463年ズルカアダ月15日(1071.8.14)セルジューク朝軍はアルメニアのマラーズギルド(Malāzğird)でビザンツ帝国軍を大破し、トゥルクマーン集団の本格的なルーム地方への流入が開始された。この地方へはマラーズギルドの戦後、Artuq, Saltuq, Mangūjik, Dānishmand らのアミールたちに率いられたトゥルクマーンが進入して各地を征服していたが、これらのアミールたちの間で不和や紛争が起こっていたため Malikshāh はワズィール Niẓām al-Mulk の賛同を得て Sulaymān をルームの王権の統治へ送り、アミール間の紛争を止めさせ、更なる征服地を王国に付加させることをもくろんだ。Rashīd al-Dīn によれば、この当時の Sulaymān の存在は「大セルジューク朝」にとって「もし彼が殺されても国運の足から一本の刺が抜け出る」程度の取るに足りないものであったという [JT : 39]。父 Qutalmish が Alp Arslān とスルターン位を争って敗れ去ったため「大セルジューク朝」スルターンの、その子 Sulaymān に対する扱いは過酷なものであったようである。

こうしてスルターン Malikshāh 時代にルーム地方へ送られた Sulaymān は、al-'Azīmī によれば467(1074/5)年にニーキーヤ(Nīqīya=ニカエア)を征服した [TA : 16]。同年 Ibn Qutalmish (Sulaymān) はシャームのタバリーヤ(Ṭabarīya=ティベリアス)でトゥルクマーンのアミール Sh.k.l.y²⁷⁾と共にクドス(al-Quds=エルサレム)や Ramla の支配者で、セルジューク朝スルターン Malikshāh の臣下に復帰してシャームでファーティマ朝の勢力に対峙しようとしていた Atsiz²⁸⁾と戦い、弟や従兄弟と共に敗れて捕虜となった。この事件は Sibṭ ibn al-Jawzī だけが記録しているが、それによれば、この年ラビーウI月(1074.10.25-11.23)に地中海岸の 'Akkā を征服し、ファーティマ朝の Amīr al-juyūsh Badr al-Jamālī の妻子を捕らえた Sh.k.l.y に対して「シャームのトゥルクや al-Nāwakīya²⁹⁾の頭目で、クドスと Ramla の主であった Atsiz」が Badr の妻子と Sh.k.l.y が得た財の半分を引き渡すよう命じ、Sh.k.l.y がそれを拒絶したため両者の関係は悪化し、この年ラマダーン月(1075.4.20-5.19)には地中海岸で両者が会戦し、Atsiz が勝利していた。タバリーヤの戦いはこの後の事件であるので、467年のラマダーン月以降に起こった。この戦いの前 Sh.k.l.y はルームにいた Sulaymān に手紙を送ってシャームを狙うよう扇動し、次のように言ったという。

汝はセルジューク家の、王家の一員であり、我々は汝に従い、奉仕し、汝を名誉に思い、誇りとしている。

しかし、Atsiz は王家の一員ではなく、我々は彼に服従し、追隨するのに満足していない。…(中略)…我々が彼を打ち破り、彼をシャームから遠ざければ財政援助をするという約束(wu'ūd bi al-amwāl)がミスルから我々のところに来ている。[MZ : 174-5]

この提案に応じた Sulaymān はルームから来て Sh.k.l.y に合流し、タバリーヤへ向かい、ミスルの主《ファーティマ朝》への服従を表明し、クドスから来た Atsiz とタバリーヤの郊外で

対戦し、敗れ、Sh.k.l.y は殺され、Sulaymān は捕虜となった。さらにその後ルームにいた Ibn Qutalmish (Sulaymān) の兄弟がハラブに来て町を包囲した。当時のハラブの主、ミルダース朝の Naṣr b. Maḥmūd はハラブのアフダース³⁰⁾と共に町を出て彼と戦い、撃退した。その後この Sulaymān の兄弟は Salamīya に来て Atsiz と Sulaymān の処遇について使者を交わした。Atsiz はその際「私は彼【Sulaymān】のことでスルターンに使者を送り、返答を待っている。スルターンが命じたことを私は彼に実行する。」と言ったという。

467年のルームからシャームへその活動の舞台を移した Sulaymān の取った行動は当時のシャームにおけるセルジुक朝とファーティマ朝の対抗関係を背景にしたもので、Atsiz に対してスナナ派のアッバース朝ハリーフアの保護者であるセルジुक朝王家の一員の Sulaymān がシア派=イスマーイール派のファーティマ朝への服従までして「大セルジुक朝」に付こうとしていた Atsiz に戦いを挑んだのはそれまでの Sulaymān ら Qutalmish の息子たちの「大セルジुक朝」スルターンに対する卑屈なまでの生活態度を一変させるものであった。ルーム地方における征服活動の成功を実績として Sulaymān 率いる「大セルジुक朝」とは別のセルジुक家集団はこれ以降次第に自立への道を歩み始めるのである。Atsiz に対して Malikshāh がどのような返答を行ったのかは史料に記録がないが、翌468年ジュマダーI月 (1075.12.12-1076.1.10) Sulaymān とその弟が Atsiz の使者と共にバグダードへ到着し《MZ : 178に地名は記されていないが、MZ が参照した作品を書いた Ghars al-Ni'ma が居住していたのがバグダードであり、使者が到着したのもバグダードであると推測できる》、Sa'd al-Dawla al-Kawhar-ā'in が二人をスルターンの許へ送り届けた。結果から見ると Sulaymān がその後、特に処罰を受けた様子もなく、先の Atsiz の言葉に続けて Sibṭ ibn al-Jawzī は Ibn Qutalmish (Sulaymān) がアンターキーヤ (Anṭākiya) とハラブを相次いで攻撃したことを記している [MZ : 175-6]。その後 Sulaymān は再びルーム地方へ戻ったようで、暫くイスラーム史料にはその名が見えない。ビザンツ帝国の皇女 Anna Comnena³¹⁾ はその父帝アレクスイオス時代の歴史を著作に残しているが、その中では Sulaymān は「東方全域の支配者 “Soliman”」として登場し、ニカエアに宮殿を有する彼の率いる「無神のトゥルク人」は Propontis 《マルマラ海》の周辺にまで住むようになり、「Bithynia, Thynia 周辺の全ての地方を荒らすため絶えず襲撃者を送り出し、彼らは馬で、徒歩で Bosphorus まで襲撃を行い、多くの戦利品を運び去り、殆ど渡海を企てんばかりであった」という [Alexiad : 93]。ここに描かれているのはアレクスイオス帝治世 (1081-1118) の初め頃のことであり、ルームへ戻った Sulaymān がニカエアを中心にして自らの地歩を固め、ビザンツ帝国の残り少ないアジアの領土へ、さらには帝都コンスタンティノーブルへの圧迫を強化していった状況である。イスラームの前線地帯に留まるように「大セルジुक朝」領土の辺境に送られた Sulaymān にとって異教徒に対する聖戦を中心とする彼の行動を統制するものは何もなく、ビザンツ帝国との辺境の前線地帯に送られたことによって Sulaymān はむしろその地で、その後の行動の可能性を広げる力量を蓄え、やがて再び、東方へと転進する機会を待っていた。

次に諸史料中に Sulaymān の名が挙がり、彼の事蹟中最も顕著な出来事はシャームのアンターキーヤの征服である。この事件を記録する文献はアラビア語の al-'Azīmī, Ibn al-Athīr, Ibn al-'Adīm, Sibṭ ibn al-Jawzī, ペルシア語の Aqsarā'ī, さらにビザンツ史料の(原文ギリシア語) Anna Comnena とアルメニア語のウルフアの Mateos がある。アラビア語文献のうち最も詳しい記録を残すのが Ibn al-'Adīm のハラブ史摘要 ZH であり、以下この記録を中心として Sulaymān のアンターキーヤ征服とその後の状況を追ってみよう。

まずアンターキーヤ征服に先立って Sulaymān は475(1082/3)年にキリキアの Ṭarsūs をビザンツ帝国の手から奪い Ṭarābulus のカーディー Ibn 'Ammār にその地に置くカーディーとハティーブの派遣を要請している。アンターキーヤはシャームを南北に貫流するアースイー(Āṣī=オロンテス)河口に近い、かつてはローマ領アジアの主都であった町であり、アラブの征服後シャーム北部の al-'Awāṣim の中心都市であったが、358(969)年にビザンツ帝国の將軍 Michael Burtzes に奪われ、以後ビザンツ領となっていた。Sulaymān はこのアンターキーヤを477年シャアバーン月10日(1084.12.12)◀MZ : 229ではラジャブ月末日(1084.12.2), TA : 19; KT : X 139ではシャアバーン月とする▶に征服するのであるが[ZH : 87], 征服に至る事情については Ibn al-'Adīm には記録がなく、むしろ Anna Comnena, Ibn al-Athīr, Sibṭ ibn al-Jawzī が記録を残している。それらの記録によれば、マラーズギルドの戦いでセルジューク朝のスルターン Alp Arslān に敗れた前皇帝 Romanus Diogenes の寵臣、アルメニア人の Philaretus ◀VN : 161では Filartos, ZN : 86, 7では al-Filārdūs, MZ : 229; KT : X 138では al-Firdaws▶は皇帝の没落後アンターキーヤの主となったが、住民に人気がなく、息子とも対立し、その息子がニカエアの Sulaymān に開城を約束する使者を送り◀Anna Comnena は息子自身がニカエアへ赴いたとしている▶, Sulaymān はそれに応じて行軍を知られないよう夜中に軍を進め、アンターキーヤへ到着した。Sulaymān の率いる兵の数は ZH : 87では280人, KT : X 138では300騎と多数の歩兵, VN : 161では300人とされていて大軍を動員しての軍事行動ではなく、隠密裡の作戦であった。ZH によれば Sulaymān は町へ通報されることを恐れて郊外の al-'Imrāniya という私領地の住民を全て殺したという。町の主 Philaretus は町を離れており、アンターキーヤは無防備な状態にあった。Sulaymān 軍の一隊が、内通者の手引きで密かに城壁を登り、内側から門を開いて全軍が町に入った。一般の市民は翌朝まで何も知らなかった。一夜明けて戦いが起こったが、町には守備兵がいなかったため激戦には至らず、住民が逃げ込んだ内城(qal'a)を残してシャアバーン月15日(1084.12.16)の金曜日にムスリムは al-Qusyān という場所でサラトし、その際には110人のムアズズインとシャームの人々多数がアザンを行った。当初比較的少数であった Sulaymān の軍には Ibn Manjāk 率いる300騎を初めルームから援軍が到着し、大兵力になったという。

以上が115年ぶりにムスリムの手に戻ったアンターキーヤの Sulaymān による征服の模様であるが、それまでビザンツ領であったアンターキーヤがそこに近い、例えばハラブやディマシクの領主ではなく、それらよりも遙かに遠いニカエアを支配する Sulaymān によって征服

された理由は何であろうか。上に記したアンターキーヤの主 Philaretus の息子の内通が事実であるとすれば、彼が内通する相手として選んだ Sulaymān は彼にとって他の者より好ましい条件を備えた人物であったはずである。その辺りの事情は全く史料中に記録がないが、次の二つの傍証から Sulaymān がアンターキーヤの征服に成功した理由を推測してみたい。傍証の一つは時期はいつか正確に判らないが、Sulaymān がビザンツ皇帝アレクシオスと休戦協定を結んでいたこと [Alexiad : 152] である。つまり、そのような休戦協定はしばしば破られたものの、一旦休戦協定を結んだ以上 Sulaymān が特に配下のトゥルクマーン集団の戦利品獲得の欲望を満たすため、積極的にビザンツ領に聖戦を行う大義名分はなかったはずである。傍証の二つ目はイスラーム史料 (MZ と [KT : X 139]) と Mateos [VN : 161] が記録するように、町の征服後も Sulaymān が特にキリスト教徒住民に配慮して、町の教会とその中の財宝を押収したほか恒例の略奪を行わず≪もつとも Ibn al-'Adīm はトゥルク人が数え切れないほどの略奪をしたとしている [ZH : 88] ≫ Sibṭ ibn al-Jawzī によれば、

Sulaymān は寄託物 (wadā'ī) に手をつけず、軍に布告した。「キリスト教徒 (al-Naṣārā) の誰にも手出しするな。人の家に押し入るな」と。誰からも 1 デイルハムも取らなかった。キリスト教徒は彼に好感を持ち、彼の公正は人々に行き渡り、Antākiya は復興して全ての地方のうち最良の状態に戻った。 [MZ : 229] という。この二つの傍証から筆者は次のように推測する。ルームで絶えず異教徒と対峙する生活を余儀なくされた Sulaymān は、彼らに対して常時積極的な聖戦を行うばかりでなく、時には休戦して態勢を立て直しや自らの生活の安定を図らねばならなかったもので、戦場では敵となるキリスト教徒に対して一定の譲歩を行うことも躊躇しなかった。かつて Sulaymān はタバリーヤでの敗戦後、時期は不明であるが、アンターキーヤを包囲し、町の住民に町の周辺農地 (sawād) を略奪から守るため、毎年 2 万ディーナールの支払を認めさせ、監視と保護のため城門に立ったという [MZ : 175-6]。この記事によって Sulaymān が当時の町の置かれていた状況のある程度把握していたことが窺われ、さらにルームにおける Sulaymān の征服活動について何がしかの情報を得ていたはずのビザンツ帝国領アンターキーヤの住民もキリスト教徒に対する強硬方針一本槍ではない、Sulaymān の柔軟な姿勢に期待し、敢えて不人気な Philaretus を追い出してまで Sulaymān の征服を迎えたのではなかろうか。

Sulaymān はアンターキーヤ征服後スルターン Malikshāh に勝利を報告し、当時ハラブの主になっていたウカイル朝の Sharaf al-Dawla Muslim b. Quraysh al-'Uqaylī にも戦利品のうちからかなりの贈り物をした。ところがこれ以降 Sulaymān と Muslim の関係は悪化してやがて両者は開戦に至る。以下でその経緯を述べよう。472 (1079) 年にハラブの主がミルダース朝からウカイル朝の Muslim へと替わった。Muslim は 477 (1084) 年にディヤール・バクルをめぐる争いからファーティマ朝に款を通じたことが発覚し、その処罰のため Malikshāh がウカイル朝の本拠マウスイルにまで来たが、Muslim はワズィール Nizām al-Mulk の執り成しで危地を脱したもののハラブには戻れないでいた。この Muslim が新たにアンターキーヤの主となった Sulaymān に税 (al-māl) を要求し、支払わない場合はスルターンに対する不服従と見

なすと脅迫したのである。それに対して、Ibn al-Athīrによれば、Sulaymānは次のように答えたという。

スルターンへの服従は私の徴 (shī'ār) であり、覆い (dithār) である。私の領土ではフトバも貨幣も彼によっている。この町【アンターキーヤ】や異教徒の地方のうち神がその幸福により、私の手で征服させたものを私は彼に知らせた。Antākiyaの主が私以前運んでいた税は、彼が異教徒であり、自分の首と仲間のジズヤを運んでいたのである。私は神のおかげで信者であり、何物も運ぶことはない。[KT : X 139-40] こうして Muslim と彼に対する税の支払いを拒絶した Sulaymān の敵意は増大し、互いに領土を襲撃し合うようになり、被害を受けたハラブ周辺農地の住民が Sulaymān に訴えると、彼は次のように言った。

私は事件を甚だ遺憾に思っている。しかし汝らの主【ハラブの支配者 Muslim】が私にそうすることを余儀なくさせたのだ。私は習慣としてムスリム【ここでは人名でなく、イスラーム教徒の意味の一般名詞】の財産を略奪したことはない。シャリーアが禁じたものを取ったこともない。[KT : X 140] そしてその後住民から取ったものを返還したという。このような経緯があって Muslim の配下からも Sulaymān に付く者が多くなり Muslim はハラブでも大きな支持を得られなかった。こうした状況で両軍は478年サファル月24日 (1085.6.21) ハラブとアンターキーヤの間を流れる 'Ifrīn ('Afrīn) 河の畔、Qurzāhil という場所で会戦し、Sulaymān の4000騎に対して Muslim は6000騎を率いていたにもかかわらず、自軍から裏切りが出たこともあって敗死した。そして Muslim の死は1年後に Sulaymān 自身が死を迎える原因ともなった。Ibn al-'Adīmによれば Sulaymān は Muslim 軍に勝利した後ハラブへ来て約1ヶ月町を包囲したが、征服は叶わなかった。その後、ハラブから南下して Ma'arra al-Nu'mān と Kafartāb を取り、Shayzar, L.t.min へも進軍した。さらに Sulaymān はキンナスリーン (Qinnasrīn) に城塞を築き、そこへ移って敗死させた Muslim の妻 Manī'a bint Maḥmūd b. Šāliḥ を娶った。一方ハラブの町ではライスで、アフダースの頭目 (mutaqaddim) al-Sharīf Ḥasan al-Ḥutaytī が内城に拠るウカイル朝の Sālim b. Mālik と相談して Sulaymān の攻勢に対してスルターン Malikshāh の援助を仰ぐことを決定し、スルターン自身の来援を求めた。しかし、スルターンが到着しないため al-Ḥutaytī は改めて使者を当時のディマシクの支配者で Malikshāh の兄弟でもある Tāj al-Dawla Tutush に送り、ハラブを引き渡すことを提案して来援を乞うた。Tutush はこれに応じて479年ムハッラム月 (1086.4.18-5.17) にディマシクを出発し、途中キンナスリーンの Sulaymān の城塞を包囲した後同年サファル月18日 (1086.6.4) にハラブ郊外の 'Ayn Saylam で Sulaymān の軍と会戦した。この戦いで Sulaymān は敗死した。Ibn al-'Adīm は Sulaymān の死因について2説があったことを記しているが、そのうち当時最も流布していたのが、短剣で自害したというもので、Ibn al-'Adīm の他、Ibn al-Athīr, Aqsarā'ī とビザンツ史料の Anna Comnena もこれを伝えている [ZH : 97, KT : X 147, MAA : 20/ A 75, Y 80, Alexiad : 154]。もう一つの説は戦死したとするもので、こめかみに矢が当たって落馬し、絶命したと伝える [ZH : 97, MZ : 244]。第二の説について Ibn al-'Adīm は次のような記録を残している。

戦士たちが戦死者の遺品を検分していて宝石や黄金で飾られた鎧を見つけた。その知らせが Tutush に届くと彼は鎧を取り寄せて言った。「これは王の持ち物のようだ」と。彼がそれを見つけた場所へ行くくと血塗れの遺体があった。彼は「これがそのようだ」と言った。彼はかねてから「私が示して初めて汝らは遺体がどれかを知るであろう」と言っていた。「どのようにして汝はそれが判ったのか」と問われると、彼は「この足は私の足に似ている。セルジューク一族の足は互いに似ているのだ」と言った。それから彼は「我々は汝に悪いことをした。汝らを速ぞけた。そして今も我々は汝らを殺している」と言って両目を擦り、彼【Sulaymān】の死を悲しんだ。彼に慈悲を求め、高価な帷子を取り寄せて彼を包み、サラートをした。その遺体を Ḥalab に運び、Muslim の傍らに埋葬した。[ZH : 97-8]

Sulaymān の遺体がどのような扱いを受けたかについては Ibn al-Athīr はそれが腰布 (izār) 一つでハラブに送られたとも記しており、上に挙げた説とは著しく異なっている。記録の上でどちらが真実であったかを判定する術もないが、Ibn al-'Adīm の記事が幾分か的事实を反映したものであったとすれば Sulaymān の敗死は「大セルジューク朝」のスルターンに反抗した結果であったというより、むしろシャームのハラブを中心とした地域社会における Sulaymān を初め、ウカイル朝や同じセルジューク家の Tutush さらにはハラブのアフダースの長 al-Ḥutaytī らの思惑が複雑に入り組んだ覇権争いの結果であったと見た方がよい。事実それまでも Sulaymān はルームへの派遣以来スルターン Malikshāh に対して反抗することもなく、ニカエアを中心とした独立の支配圏をルームに有していたもののあくまでもその存在はスルターンのアミール≪ビザンツ史料の Anna Comnena は Sulaymān をアミール (Ameer < Amīr) と呼んでいる≫としてのものであった。

さらに Sulaymān の死後スルターン Malikshāh 自身がシャームに親征し、479年ラマダーン月初日 (1086.12.10) にはアンターキーヤに入るが、そこに残っていた Sulaymān のワズィール al-Ḥasan b. Ṭāhir は町をスルターンに引き渡し、改めてそのワズィールが町の税のことでスルターンに雇われたこと、スルターンは Sulaymān の子とその一族を連行し、彼らにホラーサーンでイクターウを与えたことがそれぞれ Ibn al-'Adīm と Sibṭ ibn al-Jawzī によって記されている [BT : 58/ V 475, MZ : 240]。これらの記事から Malikshāh が Sulaymān の敗死後もその臣下や一族を処罰しなかったことは明らかであり、父 Qutalmish とは違って Sulaymān はスルターン位を狙ったり、スルターンの権威に挑戦しようとしたのではなかった。al-'Azīmī や Ibn al-'Adīm は、スルターン Malikshāh がアンターキーヤを得てから al-Suwaydiya に向かい、「彼の王権が東の海 (アラビア海、ペルシア湾) から西の海 (地中海) に達したことを神に感謝して海岸でサラートした」ことを伝えている [TA : 21, ZH : 101]。Sulaymān の活動した時代はセルジューク朝勢力の膨張と絶頂の時期に当たり、Malikshāh の領土はマーワラーアンナフルからシャームに及ぶ広大なものとなった。このような時代環境の下で、Sulaymān の活動は、父 Qutalmish と比べてルームやシャームの地域社会とより密接な関連を持つものとなった。Qutalmish の征服地や所領支配の実態がいつこうに明らかでないのに対して Sulaymān のアンターキーヤ征服後の処置などは断片的とはいえ、彼がその征服地や所領の恒久的な保

持に配慮していたことを明示している。Qutalmish が Tughril bik の命令で、アルメニアに遠征し、また対 al-Basāsīrī 作戦に投入されて、イラクやジャズイーラの各地に転戦し、自らの所領の Girdkūh に籠城してスルターンの討伐を受けるというようなめまぐるしい行動を取ったのに対して、Sulaymān はルームやシャームで自立した勢力の確立を図る一方でスルターン Malikshāh に対しては服従の姿勢を保持して王朝国家の権威の中枢に挑戦する意志を見せなかった。その意味で Sulaymān はセルジुक家内部の、スルターンの権威を支持するトゥルクマーン集団の頭目の一人に位置づけられ、その領土が「東の海と西の海」の間にわたる「大セルジुक朝」の絶頂期はまさにこのような存在のセルジुक一族とスルターンの統治の一翼を担うべく各地に配置されたアミールやアタベグ (atābik=後见人) たちの忠誠心の結集によってその実現を見たのである。

4. Qilich Arslān b. Sulaymān

ルームでは477(1084)年に Sulaymān がアンターキーヤへ赴くに当たって彼は Apelchasesem (<Abū al-Qāsīm) にルームの統治を委任していった。Abū al-Qāsīm の事蹟は Anna Comnena の記録に詳しいが、それによればアミール Sulaymān の自殺が全アジアに知れ渡ると各地を支配するサトラブ (satrap)³²⁾ はそれぞれの領土を確保し、大サトラブの Abū al-Qāsīm はニカエアを押さえてビザンツ帝国に対しても攻勢に出た。一方で自らのシャーム遠征と並行するか、あるいはその後かに Malikshāh は部将 Prosuch (<Bursuq³³⁾) に5万の兵を与えてルームに派遣し、ニカエアを3ヶ月間包囲させた。苦境に陥った Abū al-Qāsīm はそれでも Bursuq に降参するくらいならビザンツ皇帝の召使いと呼ばれる方がましであるとして皇帝に援助を要請して認められた。この結果スルターンのルーム遠征軍はニカエアを征服できずに東帰した。その後再び Malikshāh は Puzanus (<Būzān) 率いる遠征軍を送り、ニカエアを目指したが、皇帝アレクシオスの援助を得た Abū al-Qāsīm にまたもや撃退された。この事件の後 Abū al-Qāsīm は自らの地位の保全のため15頭のラバに運べる限りの金を積んで「ペルシアのスルターン」の許へ向かい、イスファハーン (Spacha<İsfahān) でスルターンの許に到着した。しかしスルターンは Abū al-Qāsīm を赦さず、最後に彼は Būzān の配下のサトラブに捕らえられて弓弦で絞殺されたという [Alexiad : 155-61]³⁴⁾。

この一連の経過はイスラーム史料には全く見えず専らビザンツ帝国の皇女 Anna Comnena の記録に拠っているが、Sulaymān の出発以後ニカエアの支配者としてビザンツ帝国との最前線に立った Abū al-Qāsīm は軍事的な対立ばかりでなく、皇帝アレクシオスの招きを受けて自ら帝都コンスタンティノーブルを訪問したこともあった。Malikshāh の派遣した Bursuq に降参するくらいなら皇帝の召使いになる方がましという Abū al-Qāsīm の考えには、「大セルジुक朝」の権威の下でその先兵となって働くというルームに派遣されたトゥルクマーン集団の「大セルジुक朝」に対する忠誠心より、自らの独立や生存のためには現地の事情を優先し、場合によっては異教徒のビザンツ帝国とも手を結ぶという現実的な対応を看て取れる。この辺りにも Sulaymān 時代に続く当時のルームの支配者たちの在地化、土着化の一端を看

て取ってよいであろう。とはいえ Abū al-Qāsim の最終的な拠り所とする権威は「大セルジुक朝」のスルターン Malikshāh であり、そのため Abū al-Qāsim はスルターンの許を訪れ、御機嫌を伺おうとしたが、かねてから蒙っていた不興のために殺害された。こうした Abū al-Qāsim の行動を通して見た彼の姿勢には一方でルームの現地の事情を優先しようとするいわば“分権指向”と同時に絶頂期を迎えた「大セルジुक朝」スルターンの政治的な権威に依存しようとする“中央指向”が同居していた。Malikshāh 時代のセルジुक朝支配圏における地方支配者の多くがこのような二つの指向の均衡の上に立ってその政治的な地位を保持していたと考えられ、先に述べた Sulaymān の姿勢も基本的には同様であった。ところが485年シャワール月16日(1092.11.20)に Malikshāh が没すると「大セルジुक朝」の権威そのものが衰退を始め、地方では二つの指向の均衡が崩れて“分権指向”が一気に高まりを見せることになる。Sulaymān の子 Qilich Arslān がルームで活躍を開始するのは正にこの時期であった。

さて Qilich Arslān のルームへの登場についてはイスラーム史料に言及がない。先にも記したように Sulaymān の敗死後 Malikshāh がアンターキーヤから彼の子を連れ去って以来の消息はイスラーム史料に拠る限り不明である。この時期のセルジुक朝内部の事情についてはビザンツ史料の Anna Comnena が比較的詳しい記録を残しており、それによればスルターンの兄弟 Tutuses (< Tutush) が刺客を送ってスルターンを暗殺した。この時スルターンの許で捕らわれていた Sulaymān の二人の息子は逃亡してニカエアに至り、Abū al-Qāsim の兄弟で当時ニカエアを支配していた Pulchases (< Abū al-Ghāzi) から町を引き渡され、二人のうち年長の Clitziasthlan (< Qilich Arslan) がスルターンに選ばれたという [Alexiad : 161-3]。ルームのスルターンがいつごろからスルターンを称し出したのかという問題についてはこれもイスラーム史料に確証はないが、Anna Comnena は Sulaymān を一貫してアミール (Ameer) と呼ぶのに対して Qilich Arslān はスルターンと呼ばれるので、Malikshāh 没後 Qilich Arslān がルームへ戻って以降のことと推測される。

Malikshāh の没後「大セルジुक朝」のスルターン位は彼の長子である Pargiarch (< Berk-yaruq) と、Malikshāh とカラハン朝の王族の出身である Tirkān Khātūn の間に生まれた Maḥmūd の間で争われた。487(1094/5)年に Maḥmūd と和解し、その後 Maḥmūd が天然痘で病没した後も Berk-yaruq はスルターン位をめぐる叔父の Tikish, Tutush, Arslān Arghū の挑戦を相次いで受けたがこれらを全て退け、493年ラジャブ月(1100.5.12-6.10)にはハマダーンに入ってスルターンに即位した兄弟の Muḥammad Ṭapar と戦ってフーズイスターンへ敗走した。これ以後498年ラビーウ II 月 2 日(1104.12.22)ハマダーン南方のブルージュルドで病没するまで Berk-yaruq の生涯は兄弟 Muḥammad Ṭapar との不断のスルターン位をめぐる争いに明け暮れた。この激的なスルターン位をめぐる争いを通じてセルジुक一族の間には実力こそがスルターン位を獲得するための唯一の手段であることが再確認され、その実力を確保するための合従連衡がさかに行われ、結果としてホラーサーンに拠る Sanjar 以外には決定的な実力を持っていないまでに王朝の中核部分の権力基盤は弱体化して、Malikshāh 時代にう

ち立てられ、絶頂期に達した「大セルジューク朝」スルターンの政治的な権威もそれに伴って瓦解し始めたのである。

一方ルームのスルターンとなった Qilich Arslān の身边にも大きな歴史的事件の波が押し寄せていた。それは西欧からコンスタンティノープルに到着した第1次十字軍によるルーム経由の聖地エルサレム遠征によって引き起こされた。al-'Azīmī と Ibn al-Athīr は490年ラジャブ月(1097.6.14-7.13) Qilich Arslān が最初の十字軍(al-Faranj)と戦ったと報じているが[TA : 25, KT : X 274] ウルファの Mateos によれば十字軍の襲来の際マラトヤ(Malaṭīya)を包囲中の Qilich Arslān は大軍を率いてニカエアに急ぎ戻ったが、フランク人に敗れ[VN : 189-90]首都のニカエアを失陥し、「ルーム・セルジューク朝」のスルターンがこの町に入ることはその後の歴史でも二度となかった。またエルサレム遠征の途上十字軍はかつて Malikhshāh が14年前にビザンツ帝国側から奪取したアンターキーヤの町を8ヶ月包囲の後491年ジュマダー II 月28日(1098.6.2)に征服し、以後666年ラマダーン月4日(1268.5.19)にマムルーク朝のスルターン Baybars al-Bunduqdarī によって再征服が行われるまで170年にわたって彼らの支配下に置いた。このようにルームにあった Qilich Arslān はビザンツ帝国や Dānishmand を初めとする他のムスリム・トゥルクマーン集団のアミールたちに対処するだけではなく、ヨーロッパから突如闖入した異教徒とも戦わねばならなかった。イランやイラクを中心とした「大セルジューク朝」の内部でスルターン位をめぐる激しい内戦が続いている一方で、ルームやシャームでは在地の、そして外来の諸勢力が入り乱れた十字軍戦争が各地で展開されていたのである。この時期には「大セルジューク朝」の側でもまたルームの側でも互いの事情に介入したり、干渉する余裕はなく、Qilich Arslān は十字軍にニカエアを奪われた後独自に勢力圏をルームに再構築すべく苦闘を続けていた。具体的には彼は内陸のコニヤ(Qūniya)に本拠を移し、495(1101/2)年に Qilich Arslān はカッパドキアを支配するトゥルクマーンのアミール Dānishmand と協同してフランク人を打ち破り、その将 Būymund (<Bohemond)を捕虜とする程の勝利を得ていた。

東方で Berk-yaruq の没後ホラーサーンの Sanjar の援助を得てスルターン Muḥammad Ṭapar がイラク以西の支配権を確保した頃498年シャームのディマシクで Tutush の子 Duqāq が死去し、シャームのセルジューク朝権力はアタベグ Ṭughtikīn がディマシク周辺を、Duqāq の兄弟 Riḍwān が引き続きハラブ周辺を支配することになった。ディヤール・バクル地方の都市アーミド(Āmid)とマイヤーファーリキーン(Mayyāfāriqīn)の地方史を残した Ibn al-Azraq al-Fāriqī によれば、この年 Duqāq の所領であったマイヤーファーリキーンにいた彼のワズィール Ḍiyā' al-Dīn Muḥammad はマラトヤのスルターン Qilich Arslān の許へ赴き彼をマイヤーファーリキーンへと招いた。この招請に応じて Qilich Arslān は498年ジュマダー I 月27日(1105.2.14)マイヤーファーリキーンに入ったという[TF : 272]。この事件は Ibn al-Azraq al-Fāriqī の記録にしか見えないが、同年ジュマダー II 月13日(1105.3.2)にはバグダードのスルターン Muḥammad の許に、Qilich Arslān がディヤール・バクルを目指し、

そこを領有した後一軍をジャズイーラに送ったことが伝えられたことを Ibn al-Athīr が記録している [KT : X 388] のはマイヤーファーリキーンの名は見えないものの、Ibn al-Azraq al-Fāriqī の記事に対応するものである。その後499 (1105/6) 年に Qilich Arslān はルハー (エデッサ) に来寇して十字軍支配下の町を包囲し、続いてハッラーン (Ḥarrān) の町をマウシルの領主 Jukurmish (<Chökürmish) の配下から引き渡された。Ibn al-Athīr によれば町の住民は十字軍へのジハード◀ルハーの包囲▶を期待して彼の到来を歓喜して迎えたという [KT : X 415]。この後 Qilich Arslān は重病を患い、マラトヤへ帰還したが、彼の配下はハッラーンに残った。ルハーの包囲とハッラーンの占拠については前者の町に居住していた Mateos がアルメニア暦555 (1106/7) 年のこととして記録している [VN : 231]。上記の Qilich Arslān の行動の舞台となったマイヤーファーリキーン、ルハー、ハッラーンといった都市はディジラとフラートの両河に挟まれたジャズイーラ地方にあり、Qilich Arslān はルーム地方の東南の要衝マラトヤを根拠地としてジャズイーラ地方への支配圏の拡大を図っていたものと見られる。こうしたジャズイーラへの進出の最終的な結果となったのが Qilich Arslān によるマウシルにおける支配権の確立であり、この事態はその後彼が命を失う原因ともなった。Ibn al-Athīr はマウシルをめぐる争奪戦をまことに詳しく記録しており [KT : X 422-30]、煩雑ではあるが、便宜上それを3段階に分けて以下に紹介し、Qilich Arslān の末路と彼がこの一件に果たした役割を考察してみよう。

[第1段階] セルジューク朝の Muḥammad Ṭapar が Berk-yaruq 没後スルターン位を確保すると彼はそれまで自らの実効的な支配が及んでいなかった地方を確保すべく各地に遠征軍を送った。ファールスとフーズイスターンの間の地方を所領としていた Jāwli (<Chavli) の許へも討伐軍が送られ抵抗はしたものの結局 Chavli は降伏し、イスファハーンで Muḥammad の許へ出頭した。スルターンは Chavli に十字軍の領土を奪うため彼らの支配地域へ進軍することを命じ、500年ムハッラム月 (1106.9.2-10.1) にはその見返りとしてマウシル、ディヤール・バクル、ジャズイーラを彼にイクターウとして授与した。これらの地域はいずれもかつて Chavli の所領となったことはなく、スルターン Muḥammad は自らに降った Chavli を元の所領から追い出してその軍事力を自らの西方への支配圏の拡大に利用しようとしたのである。従って Chavli にマウシルその他がイクターウとして授与されたにしても、現実には Chavli がこれらの地域の制圧に成功しなければ全くの空手形になってしまうような性質のものであった。一方マウシルの領主 Chökürmish はかつて Berk-yaruq 側に付いていたためアザルバイジャンから進軍してきた Muḥammad に498年ジュマダーI月10日 (1105.1.28) までマウシルを包囲されていたが、この日 Berk-yaruq の訃報を受け取り、Muḥammad に降伏した [KT : X 382-4]。その後自らバグダードへ赴いて一旦はスルターンへの軍事奉仕 (khidma) と税の移送を約束したものの、マウシルに帰るとその務めを怠ってスルターンの不興を買い、結果的に Chavli に彼の所領が与えられることになったのである。ここにもまたスルターンの権威の低下とそれでもなお配下のアミールたちを操縦して自らの支

配権とそれを裏付ける権威の再構築を図ろうとするスルターン側の意図を見て取れる。Chavliはこの年ラビーウ1月初日(1106.10.31)にバグダードへ到着し、al-Bawāzīj 経由でイルビル(Irbil)へ向かった。イルビルの領主でクルド人の Abū al-Hayjā' b. Mūsak al-Hadhbānī はマウシルの Chökürmish に来援を求め、それに応じて Chökürmish はマウシルを出て Abū al-Hayjā' の派遣した彼の息子たちの率いる軍とイルビル地方の Bākālbā 村で合流した。1000騎からなる Chavli 軍がそこに現れ2000騎の Chökürmish 軍と合戦した。戦いで Chavli は Chökürmish の中軍を攻め破り、半身不随(fālij)のため逃亡もままならぬ Chökürmish は Chavli 軍に捕らえられた。

以上を第1段階とする。ここでは Qilich Arslān は全く登場せず、ことはスルターン Muḥammad に将来の所領をイクターウとして与えるという約束だけを与えられ、その後は対十字軍戦役にも投入を予定された Chavli が手勢を率いてマウシル方面に進軍し、Chökürmish を破って彼を捕虜にするという経過である。Chavli がバグダードから直ちにマウシルへ行かなかったのは恐らく彼の兵力がマウシル攻撃には少なすぎ、まずはより小規模の町を攻めて、成功した際に期待される兵力の増強を得てはじめてマウシル遠征が可能になるような状況を反映していたのであろう。

[第2段階] Chökürmish が捕らえられるとマウシルの町の人々は彼の息子 Zankī を立てて Chavli への抵抗の姿勢を示した。Chökürmish のマムルークで内城を守備していた Ghuzughlī はこの年タクリートを取ったアラブのマズヤド家の Sayf al-Dawla Ṣadaqa b. Maṣṣūr, Qilich Arslān, バグダードのシフナ(shihna=軍政長官) Qasīm al-Dawla al-Bursuqī の3者に手紙を送り、Chavli を撃退することを求め、要求に応えたものには誰にでも町を引き渡すとした。このうち Ṣadaqa はスルターンに服従し、要請には応えなかった。一方 Chavli はマウシルを包囲したが、Chökürmish の手で堅固な防備を施されたマウシルの町は容易に陥落しなかった。捕らえられていた Chökürmish は毎日ラバに乗せられて町にいる配下の者たちに、町を明け渡し、自らを解放してくれるように説得の呼びかけをさせられたが、効果はなく、何日かして監禁されていた井戸の中で遺体となって発見された。

マウシルから援助を求められた3人のうち、Qilich Arslān は要請に応じてマウシル西方のナスイービーン(Naṣībīn)に到着し、彼の到着を聞いた Chavli はマウシルを撤退した。いま一人の al-Bursuqī も要請に応じて Chavli の撤退後バグダードからマウシルの東郊に達したが、「誰も彼に関心を払わず、【住民からは】彼に一言もなかった」ため、早々と撤退した。Qilich Arslān はナスイービーンで増援軍を待った。Chavli は撤退後マウシル西方で、ナスイービーンよりは東にあるシンジャールへ行き、そこに荷駄を置いて留まった。彼の許へはマルディン(Mārdīn)の領主 Ilghāzī b. Artuq が到着し、さらに Chökürmish の配下の一部も合流した。その後 Chavli はシンジャールからより西方の、フラート河畔のラフバ(al-Raḥba)へ向かった。マウシルの民と Chökürmish の軍はナスイービーンの Qilich Arslān に使者を送って互いに誓約し、Qilich Arslān はマウシルの民の服従を取り付けた。こうし

て500年ラジャブ月25日(1107.2.22) Qilich Arslān はマウスイルに入り、その主となった。彼は玉座(al-takht)に座り、金曜礼拝のフトバではスルターン Muḥammad の名を落とし、ハリーフアの後で自らの名を唱えさせた。その後の Qilich Arslān の行動は Ibn al-Athīr から直接に引用してみよう。

彼は軍をよく遇し、Jukurmish のマムルーク Ghuzughli から内城を取ったが、彼を dizdār【城主】としてそこに置いた。圧制をもたらす新奇な税(al-rusūm al-muḥdatha fī al-zulm)を廃止し、人々を公正に扱い、馴れ親しんだ。彼は言った。「私の所へ人を中傷に来る者は殺す」と。それで誰も人を中傷しなかった。Mawṣil のカーディー職には al-Qādī Abū Muḥammad ‘Abd Allāh b. al-Qāsim ibn al-Shahrazurī を任じ、ライース職(al-ri’āsa)には Abū al-Barakāt Muḥammad b. Muḥammad b. Khumays を任じた。彼は我々の師(shaykhunā) Abū al-Rabī Sulaymān の父親である。[KT : X 427]

以上を第2段階とする。ここでは最後に Ibn al-Athīr ≪555年ジュマダーI月4日(1160.5.13)生まれ≫の記録の情報源となったであろう人物の名が明示されると共に、Qilich Arslān がマウスイルからの呼びかけに慎重に対処し、町の人々との互いの誓約の結果マウスイルの主となる状況が描かれている。当初マウスイルの人々にとって Chavli を撃退して町を引き渡される3人の候補者の一人にすぎなかった Qilich Arslān が町の人々との交渉でマウスイルから当面最適の支配者と判断されていく過程はここでの記録に明らかではないが、いま一人の候補 al-Bursuqī への対応と比べて結果的に Qilich Arslān には町の人々による大きな期待が懸けられていったようである。また Qilich Arslān はマウスイルでのフトバにスルターン Muḥammad の名を落とし、自らの主権を明らかにしている。これは彼の父 Sulaymān がアンターキーヤを征服した際当時のスルターン Malikshāh へ事態を報告したという前述の記録と著しい対照を見せる。すなわちこの行動は、マウスイルを領有した時点で、Qilich Arslān はスルターン Muḥammad の権威を否定したということであり、セルジューク家に属するとはいえ、Mikā’il の子孫である「大セルジューク朝」とは異なる、Isrā’īl 直系の子孫であり、独力でルームの各地を伐り従え、十字軍勢力とも競合していた Qilich Arslān にとってはもはや長年のスルターン争いの結果地に落ちていたとも言える Muḥammad の権威を認める必要はなかったのである。この意味でウルフアの Mateos が Qilich Arslān を「西方のスルターン」と呼ぶのは[VN : 187, 218, 231]決して現実を無視した誇張ではない。

[第3段階] マウスイルの領主となった Qilich Arslān の許にはディヤール・バクルの中心都市アーミドの領主 Ibrāhīm b. Yināl や Ḥiṣn Ziyād 別名 Khartabirt の領主 Muḥammad b. Jibiq(<Chibiq)などのトゥルクマーン集団の頭目もいた。Chavli はラジャブ月にフラート河畔のラフバへ到着しラマダーン月24日(1107.5.19)に征服するまで町を包囲した。この間 Chavli はハラブの領主で、セルジューク朝の Malik Riḍwān に使者を送り、自らの所領マウスイルやディヤール・バクル、ジャズイーラを確保した暁には十字軍の手から Riḍwān の領土を解放するべく協同作戦を取ることを知らせ、この条件で Riḍwān 自身の援助も受けることになった。こうした状況で Qilich Arslān は Chavli との戦いに赴くべく11歳になる自らの息子

Malikshāh を町に残してマウスイルを後にした。彼の軍は4000騎で装備もよく整っていた。Chavli 軍にハラブの Ridwān が参加して増強されたことを知ると、Qilich Arslān 軍には心変わりをする者が出て、アーミドの Ibrāhīm Yināl は真っ先に陣を離れ、自分の所領へと去っていった。Qilich Arslān はかつてビザンツ皇帝アレクシオスがアンターキーヤの十字軍勢力の頭目 Bohemond と戦うのを援助して皇帝に援軍を送っていた。その軍隊が彼の許に帰還するまで時間稼ぎをしようとしたが、間に合わなかった。Chavli 軍は Ridwān の援助も得て4000の軍勢となったが、勇士の数は Qilich Arslān 軍より多かった。Chavli は Qilich Arslān への増援の到着前に開戦した。時は500年ズルカアダ月20日 (1107.7.13)、所はフラート河の支流ハーブール(Khābūr)河畔であった。戦いの模様は再び Ibn al-Athīr 自身の記録を以下に引用してみよう。

Qilich Arslān は自ら敵軍に攻撃をかけ、敵軍をかき乱し、旗手の手を打って軍旗をその手から離させた。また自ら Jāwli の本陣まで進み、彼に剣で切りかかってその絹を詰めた刺し子の直垂(al-kazāghand)を斬ったが、肉身には達しなかった。Jāwli 軍は彼の軍に攻撃をかけ、彼らを打ち破り、彼らの荷駄(thaqal wa sawad)を戦利品とした。Qilich Arslān が自軍の敗北を知ると、もし捕虜になれば、特に彼はスルターンと領土や、スルターン位そのものを争ったので、和平(ṣulḥ)の余地を残さなかった者の扱いを受けることを悟り、al-Khābūr に投身して Jāwli 軍の矢から自身を守ったが、彼の乗馬が水の深みにハマり、溺れた。数日後遺体となって発見され、al-Khābūr の村の一つである al-Shamsaniya に埋葬された³⁵⁾。[KT : X 430]

戦いの後 Chavli はマウスイルに行き、この度は町の人々は彼に城門を開いた。町にいた Qilich Arslān の配下はそれを阻止できなかった。Chavli は戦いの際 Qilich Arslān 側についた Chökürmish の部下を一人残らず捕らえた。彼はフトバで唱えられる名を Muḥammad に戻し、Chökürmish の配下の一団の財産を没収した。その後 Chökürmish の子 Ḥabashī がいたマウスイル上流の Jazīra ibn 'Umar ≪Ibn al-Athīr の生地≫へ向かい、暫く包囲して講和した後再びマウスイルへ戻り、Qilich Arslān の子 Malikshāh をスルターン Muḥammad の許へ送った。

以上が第3段階で、これをもって Ibn al-Athīr のマウスイルをめぐる Chavli と Qilich Arslān を中心とした記録が終わる。史料作者の Ibn al-Athīr 自身がここに述べてきた事件の約100年後他ならぬマウスイルに居住していたので、これらの経過の記録は信憑性が高く、マウスイルを中心とした優れた地方史となっている。この段階では Qilich Arslān の Chavli 軍との戦いが描写され、戦前に彼の軍が十字軍に対抗して異教徒のビザンツ皇帝を援助していたこと、ハラブのセルジुक家の領主 Ridwān まで巻き込んだ Chavli の採った作戦の巧みさ、Qilich Arslān の奮闘と自殺に等しい溺死等の事情が明らかになる一方で、戦後の日和見的なマウスイル住民の Chavli に対する態度や祖父 Sulaymān や父 Qilich Arslān と同じくその子 Malikshāh もまた「大セルジुक朝」のスルターンの許に送られることになったことが語られている。この因縁とも言うべき Isrā'īl 系の子孫たちの Qutalmish, Sulaymān, Qilich Arslān の3代にわたる相次ぐ敗死はその後のルームのスルターンたちの歴史にも大きな影響を与えず

にはいなかった。以後の歴史の中で具体的には Qilich Arslān の子孫のうちで「大セルジुक朝」やその後身であるアジャムのあるいはイラクのセルジुक朝と呼ばれる王朝との間で敵対競合関係を持った者は一人もいなかった。Qilich Arslān の子孫であるルームのスルターンたちはその後は専らルーム地方で自らの支配権を確立すべくビザンツ帝国, トゥルクマーンの Dānishmand 朝, そして時には十字軍勢力とも対立抗争を続け, あるいは状況次第で和親に入り, ますます地域社会との関係を深化させていった。彼らが「ルーム・セルジुक朝」と呼ばれる所以である。しかし, 上述の Sulaymān や Qilich Arslān の活動がそれを明示しているように彼らは決してルームのみを自らの活動の舞台と考え, その征服にのみ努力を傾注していた訳ではない。「大セルジुक朝」の絶頂期にルームで孤軍奮闘を続けていた Sulaymān にはそれを明らかにすることが許されなかったが, 彼の父 Qutalmish は言うまでもなくその子 Qilich Arslān にも明らかに「大セルジुक朝」の権威に挑戦し, 競合しようとする意志があった。ルームのスルターンの祖とされる Sulaymān や Qilich Arslān がルームの内陸地ではない, シヤームのハラブ近郊やハーブル河畔で敗死した事実が彼らの目指す目標が何処にあったのかを何よりも雄弁に物語っている。以上のような経過を考慮して筆者はルームのスルターンたちの祖先を単純に「ルーム・セルジुक朝」の祖先と呼ぶことには些かの躊躇を覚えるのである。こうしたルームのスルターンたちのルームの外, 特に東方を指向する傾向は Qilich Arslān までの時代に限らず, 西暦13世紀に「ルーム・セルジुक朝」の最盛期を現出させたスルターン 'Alī al-Dīn Kayqubād 時代(1220-37)の記録にも顕著に見て取れる [井谷1988: 132-3]。一方, 東方では552年ラビーウI月26日(1157.5.8)ホラーサーンを中心に「大セルジुक朝」の威信を回復させた Muḥammad の同母兄弟 Sanjar が没すると共に「大セルジुक朝」の時代は終焉し, さらに590年ラビーウII月24日(1194.3.19)ライ近郊の戦いでイラクのセルジुक朝スルターン Ṭuḡhril II 世がホラズムシャーフ Tikish の軍に敗死したことで「大セルジुक朝」の系統を継ぐ一族は歴史上姿を消してしまったのである。「大セルジुक朝」の系統が廃絶した後, 「ルーム・セルジुक朝」に属するスルターンたちがどのような王朝としての意識を持ち始めたのかということ以下で Rāwandī の著作に探ってみよう。

II. 「ルーム・セルジुक朝」史料としての Rāwandī の著作

Rāḥat al-Ṣudūr wa Āyat al-Surūr

Najm al-Dīn Abū Bakr Muḥammad b. 'Alī b. Sulaymān al-Rāwandī の著作 *Rāḥat al-Ṣudūr wa Āyat al-Surūr* (アラビア語で「胸の安らぎと喜びの証」の意味, 文献表 RS) は, そのペルシア語テキストの校訂者 Muḥammad Iqbāl によれば, 主として「大セルジुक朝」の歴史を内容としたものである。≪Iqbāl は「大セルジुक朝」の歴史を1194年のスルターン Ṭuḡhril の敗死までと考えている≫。史料として特に価値を持つのは最後の二人のスルターン Arslān と Ṭuḡhril II 世の治世を含む部分(555-95(1160-99)年)であり, 「最初の12人のスルターンの治世は著しく簡略で, しかも興味を引かないやり方で扱われている」という [Iqbāl 1921: 21]。

RSの写本は唯一つが確認されているだけで(Bibliothèque Nationale, Paris, Supplement Persan 1314)あるが、その書写年代は635年ラマダーン月初日(1238.4.17)と古くセルジユク朝の歴史を記したペルシア語文献の中では現存する最古のものである。校訂者 Iqbāl によれば、著者 Rāwandī はイランのカーシャーン近郊の小さな町 Rāwand の出身でアラビア文字書道を初めとする諸学芸に秀でた知識人を輩出した家系に生まれた。彼は幼い頃父を亡くし、その後母方の叔父 Tāj al-Dīn Aḥmad の許に引き取られ、そこで書道や製本、写本への金箔工芸について学んだ。577(1181)年上述のスルターン Ṭuḡhril II 世が母方の別の叔父 Zayn al-Dīn Maḥmūd を師として書道を学び始め、やがてスルターンがそれに熟達すると彼はクルアーンの写本を一部作り、その写本に装飾を施すため金箔工芸人(mudhahhib)として叔父の紹介でRSの著者 Rāwandī はスルターンの知遇を得た。585(1189)年にはマーザンダラーンに派遣された叔父に従ってスルターンの許を去るが、その後再び彼がスルターンに会うことはなかった。前述のように590(1194)年には Ṭuḡhril II 世が敗死してしまうためである。その後約6年をハマダーンの有力者の子弟を教育する役目を引き受けた後、一時引退生活を送り、599(1202)年にRSの執筆を始めた。そして最終的に完成したRSを603(1206/7)年に自らコニヤに赴いて当時のルームのスルターン Ghiyāth al-Dīn Kaykhusraw I世(治世：1192-6, 1204-10)に献上した。その後の彼の生涯は明らかではない[Iqbāl 1921：15-21]。

このような経歴の著者が著したRSは「大セルジユク朝」の歴史を記録したのもであると同時に「ルーム・セルジユク朝」のスルターンに献上されたという性格を持つため、ルームのスルターンたちの先祖の事蹟についても彼らの「大セルジユク朝」との関連を含めて言及が存在することが期待される。しかし、現実にはルームのスルターンたちの先祖の事蹟については Isrā'īl を例外として「著しく簡略で、しかも興味を引かないやり方で扱われる」どころか殆ど全く記録がないのである。その意味ではRSは「ルーム・セルジユク朝」の歴史研究に役立たない。ところが、献上先のスルターン Kaykhusraw を作品の随所で賞賛し、祝福した部分には Rāwandī 自身が、この当時のルームのスルターンを彼自身が身近に接したイラクのスルターン Ṭuḡhril と彼の先祖たちになぞらえ、結び付けようとした表現が見られる。以下でそれらの表現をいくつか引用し、「大セルジユク朝」の滅亡後、Rāwandī によってルームのセルジユク家がどのような歴史的な位置づけを与えられていたのかを明らかにしてみたい。

まず Rāwandī はその著作で Kaykhusraw を Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn ...Abū al-Fath Kaykhusraw b. 'Izz al-Dīn Qilij Arslān b. Mas'ūd b. Qilij Arslan b. Sulaymān b. Ghāzī³⁶⁾ b. Qutalmish b. Isrā'īl b. Saljūq と呼んだ後[RS：19]彼のことを以下のように讃える。

Malikshāh や Sanjar の王冠が彼によって記憶となって残る玉座の主 [20]

Malikshāh や Mas'ūd の魂が汝【Kaykhusraw】のような後継者(khalaf)を誇る [23]

Saljūq 家の王権の始まりは勝利のスルターン(Sultān-i Qāhir)Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn の7代目の祖先 Isrā'īl b. Saljūq からである [64]

この世の続く限り Malikshāh, Maḥmūd, Birkyāruq, Muḥammad, Ṭuḡhril, Mas'ūd は彼らが国都(Dār al-

Mulk)Iṣfahān や Hamadān に造らせた諸マドラサによってその美名が貯えられるであろう。…彼らの後継者, 勝利のスルターン Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn … [67-8]

Saljūq 家国運の相続人, 世界の主 (Khudāwand-i 'Ālam)³⁷⁾, Ādam の子らの帝王 Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn Abū al-Faṭḥ Kaykhusraw … [84]

【Alp Arslān】は10人の息子のうち Malikshāh を皇太子 (walī 'ahd) としていた。Malikshāh は国土を保持し, 世界の主, Ādam の子らの帝王, 勝利のスルターン Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn … に遺産 (mīrāth) としてそれを残した [123]

Malikshāh の王権と王冠と玉座の相続人, 勝利のスルターン Abū al-Faṭḥ Kaykhusraw [136]

【スルターン Sanjar の生涯は72年と数ヶ月, 治世は61年であった】世界の主, Ādam の子らの帝王, 勝利のスルターン Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn … がその生涯と王権の相続人であるように, 彼の命令が Sanjar の国土の諸方に達するように [185-6]

彼【スルターン Muḥammad の子 Maḥmūd (治世: 1118-31)】の王権と玉座の相続人, 彼の栄光と幸運を持つ者, 勝利のスルターン Abū al-Faṭḥ Kaykhusraw … は彼より覚醒し, 支配者らしい [205]

至高の王が Malikshāh と Muḥammad の王権の相続人, 勝利のスルターン … Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn … に王権と生涯を享受させるように [256]

この幸運な君主の国運は Saljūq 家の樹々 (ashjār) に秋枯れの後の, 春季の光と花を現し, 芳草の活力と緑の新鮮さを生ぜしめたので [271]

至高なる王が…世界の主, 最高のスルターン, 偉大な帝王中の帝王… Abū al-Faṭḥ Kaykhusraw Ghiyāth al-Dīn をこの王権の相続人とするように。彼の国運の軍旗をこちらの方【イラク】へ達せしめるように。'Irāq には Ṭughril, Arslān, Sanjar, Sulaymān, Malikshāh, Alp Arslān の記憶がある。 [403]

【Kaykhusraw が】Saljūq 家のスルターンたちの王権と王冠と玉座の相続人であるように [458]

これらの表現は RS 全体を通じて18箇所現れるが, それらにおいて「勝利のスルターン」と呼ばれる Kaykhusraw が「大セルジユク朝」スルターンたちの「後継者」, 彼らの王権の「相続人」とされていることが直ちに理解される。Rāwandī は先で筆者が Isrā'īl 以下4人のルームのスルターンの祖先たちの事蹟について述べたような内容について殆ど全く述べておらず, かつてルームのスルターンとその祖先が「大セルジユク朝」と敵対競合するような事態があったことを彼自身がどの程度把握していたのかは明らかでないが, 「大セルジユク朝」とその直系の後継者がもはや存在しなくなった時点で, Rāwandī は, 彼自身のイラクにおけるセルジユク朝政権復活の願望を込めてルームのスルターン Kaykhusraw を「大セルジユク朝」の王権の相続人と呼んでいるのである。Rāwandī による, ルームのスルターンを「大セルジユク朝」の相続人とみなす呼び方は西暦13世紀のルームにおける歴史著作に明らかな影響を残し, その代表的な著作を書いた Ibn Bībī は Kaykhusraw の息子, スルターン Kayqubād に「大セルジユク朝」のスルターンたちを「我々の伯父たち」(a'mām-i mā) と呼ばせている [井谷 1988: 143]。かつては, 時に敵対や競合の対象となってきた「大セルジユク朝」が滅亡した後もなお存在した「ルーム・セルジユク朝」は一転して彼らの後継者, 相続人としての意識を持ち始めたので

ある。つまり歴史上、「大セルジुक朝」が滅亡した後、その権威や記憶を最も必要としたのは「ルーム・セルジुक朝」に他ならなかった。

おわりに

以上アラビア語、ペルシア語の文献資料を用いて、「大セルジुक朝」と「ルーム・セルジुक朝」の相互関係を考察してきた。結果的に「ルーム・セルジुक朝」は「大セルジुक朝」の王権の後継者、相続人としての意識を持つに至るとというのが一応の結論であるが、歴史的にはこの両者は同じセルジुक家でも Isrā'īl 系, Mikā'il 系と名祖の子供の段階で分枝した、そもそもの系統が異なる王朝であり、むしろ初期には競合関係にあったと見るのが妥当であろう。ルームのスルターンたちの祖先に当たる, Qutalmish, Sulaymān, Qilich Arslān はいずれも「大セルジुक朝」のスルターンやその一族 (Tutush), 配下 (Chavli) の者に敗死させられた。こうした経過を踏まえて以後ルームのスルターンたちは活動の舞台をルームに限定して在地化, 土着化していき、一方「大セルジुक朝」の子孫たちの方は Sanjar 死後 (1157) かつての配下の有力アミールやアタベグ, さらにホラズムシャーフ政権抬頭の前に衰退し、やがて Rāwandī がかつて自ら仕えたスルターン Ṭughril II 世に至って滅亡する (1194)。その後もルームに残った「ルーム・セルジुक朝」は西暦13世紀, すなわち「大セルジुक朝」の子孫たちの廃絶後に至って自らを「大セルジुक朝」の王権の後継者, 相続人と位置づけ、その権威を自らに帯びさせ、利用しようとするに至るのである。ともあれ、本稿で見たように「大セルジुक朝」も「ルーム・セルジुक朝」も共に当時の入り組んで変転きわまりない、地域、民族、宗教が常に激しいせめぎあいを繰り返す西アジアに存在した王朝であり、すでに王朝国家建設の以前からセルジुक家をめぐって何らかの関連をもって登場する諸勢力はサーマーン朝, ガズナ朝, カラハン朝を初め、ブワイフ朝, アッバース朝, ファーティマ朝, 十字軍, さらに時代を下ればザンギー朝, アイユーブ朝, ホラズムシャーフ朝, モンゴル人, マムルーク政権とオスマン帝国成立以前の、ミスル以東に存在した殆ど全ての政治勢力であると言ってもよい程である。これら全ての関連資料や研究を参照するだけでも膨大な時間と努力を必要とし、資料研究の点でもまだまだ不明で、不十分なことが沢山ある。本稿で取り上げたようなテーマについては、諸資料中の記事がとりわけ断片的で、しかも錯綜しており、それらの断片をそれぞれの文脈の中から搜し出し、関連を見だしてそれらをつなぎ合わせて行くためには当然筆者自身の推測を伴う多くの判断が不可避であった。それらの判断の当否は偏に筆者自身の史料の読解と分析の能力にかかっていると言ってよい。本稿を筆者自身の、文献資料研究を中心とした、今後のセルジुक朝史研究の新たな出発点と位置づけ、さらに正確なセルジुक朝時代史の構築に励みたいと思う。

注

1) セルジुकという語を表す最も一般的な綴は s.l.j.w.q であるが、その時代に生き、トゥルク諸族の言

語を記録した Maḥmūd Kāshgharī によれば, Sāljūk (原綴 s.l.j.k 母音符号付き)である [DLT : 120 v]。末尾に k の文字が用いられていることから、この語は前舌母音で発音されたと推定され、また長母音はなく、日本語ではセルジュークと表記するのが適当であろう。さらに j の文字が ch を写したのならばセルチュークの表記がより正しいかもしれない。

- 2) Kāshgharī によれば、トゥルク人は元来20の部族(qabila)から成っており、ルームに近い順で、ベチエネグ(Bajanak)、キプチャク(Qifjāq)、オグズ(Ughuz)…のように分布しているという。また3番目のオグズはアラビア語で「トゥルクマーンのグズ」(al-Ghuzziya al-Turkmāniya)とも言い、トゥルクマーンとはトゥルク人に似たもの(Turk-mānand)の意味であるという [DLT : 10 v, 20 v, 311 v, 312 v]。学問的な当否はさておき、Kāshgharī の説が当時の一般的な認識であったと考えてよい。
- 3) 748年ラジャブ月下旬(1347.10.27-11.5) Muḥammad b. al-Ḥusayn al-Kāzīrūnī なる人物の手により、ルームのカイセリで Naṣīr al-Dīn Tūsi の著作 *Tansīkh Nāma-yi Ītkhāni* と共に筆写され、現在はトルコ共和国イスタンブール市のスレイマニエ図書館に所蔵される、Naṣīr al-Dīn 'Abd Allāh b. 'Umar al-Baydawī のペルシア語による歴史著作 NT はこの王朝の歴史について、特に著者の出身地、ファールス地方との関連で比較的詳しい記事を残している。それによれば、サルグル朝の初代は、セルジューク朝のスルターン Muḥammad Ṭapar の孫、Malikshāh III 世 (Malikshāh b. Maḥmūd b. Muḥammad) のアタベグ Muẓaffar al-Dīn Sunqur b. Mawdūd Salghurī であり、543(1148/9)年に Malikshāh が敗走した後ファールスの政権を掌握した [NT : 165 v]。サルグルは Kāshgharī によれば、オグズ24部のうち第5番目の部族である [DLT : 20 v]。
- 4) 「大セルジューク朝」なる名称がいつ、誰によって、またどのような意図で用いられ始めたのかについては筆者は未だに確定できていない。本稿で使用した歴史文献のうちでは al-Ḥusaynī が、Alp Arslān, Malikshāh, Sanjar の3人を特に「最大のスルターン」(al-Sultān al-'Azam)と呼んでおり、この表現が敢えて言えば、「大セルジューク朝」の呼称に対応するものであろう。
- 5) 372(982)年に書かれた著者不明のペルシア語の地理書 HA ではハルルフ(Khallukh =カルルク)の王号は jabghūy 古くは yabghū と言うとしている [HA : 81/17 b]。同じく272(885)年にその地理書を完成させた Ibn Khurdādhbih はハルルフ(al-Kharlukh)の王号が jabghūya であるとしている [MM : 16]。一方 Kāshgharī は「yafghū はハーカーンの臣下のうち、ハーカーンより2段階(darajatayn)下の者のラカブ」[DLT : 229 v]と説明している。オグズ族の間ではヤブグはカルルク族のように王号としては用いられておらず、Kāshgharī の説明のように用いられていたと考えるのがより適当であろう。いずれにせよ、オグズ族に王またはハーカーンが存在したのかという問題とも関わるのでオグズ族の間でのヤブグの語の使用については今後の研究課題としたい。
- 6) この人物の名前は諸史料で一貫して q.t.(t)l.m.sh と綴られている。この綴をトルコ語の単語としてどう読むかであるが、その際最も大きな手がかりを与えてくれるのが Kāshgharī の記事である。Kāshgharī は qutalmaq (意味は「幸福を取る」)という動詞を採録しており [DLT : 165 r], q.t.l.m.sh はこの動詞語幹に -mish / -mush の語尾が付いた形と考えられる。すなわち q.t.l.m.sh は Qut-almish と読むのが最もふさわしい。但し、全く同じ綴で Qutulmish と読む可能性もある。Kāshgharī によれば、その場合は動詞 qurtulmaq (意味は「救われる」)の短縮された(maḥdhūf)形である qutulmaq の語幹が用いられることになる。本稿ではより一般的に他の研究書(特にトルコ共和国で出されたセルジューク朝

関係のもの、例えば[Turan 1965])などでも用いられている Qutalmish の形を採った。

- 7) al-'Azīmi は483(1090/1)年ハラブ生まれで、全体としては555(1160)年までの記事を含む歴史書を残した。写本は唯一つしか伝存せず、633年ジュマダー II 月11日(1236.2.21)に筆写の完成したものがイスタンブルの Beyazit Umumi Kütüphanesi に所蔵される(Kara Mustafa Paşa 398)。文献表の TA はこの写本からセルジューク朝関連の記事をアンカラ大学の Ali Sevim 教授が抜粋校訂し、序言とトルコ語訳を付したものである[Sevim 1988 : 9-11]。
- 8) Ibn al-Azraq al-Fāriqī は510(1116/7)年生まれで、572(1176/7)年以降に没した。彼の唯一の著書が *Ta'rikh Mayyāfāriqīn wa Āmid* 「マイヤーファークィーンとアーミドの歴史」であり、主要な写本として British Library 所蔵の Or 5803, Or 6310 の2点が伝存する[Hillenbrand 1990 : 5, 15-8]。文献表の TF はこれらの写本をもとにしたマルワーン朝関連部分の校訂テキストである。
- 9) ADS のテキストを校訂して出版した Muhammad Iqbāl は先行する Karl Süssheim の説を引用して、この文献の真の著者は不明であるが、この文献の冒頭に掲げられた al-Husayni の著作 *Zubda al-Tawārikh* がこの作品の情報源の一つであることは推測できるとしている[Iqbal 1933 : 5]。ADS の写本は唯一つしか伝存せず(British Library, Stowe Or 7)奥書に記年がないが、作品に含まれる最後の記事は622(1225/6)年のものであるので、この年以降に書かれたものと推測される。写本のファクシミリ版のテキストが1980年にアゼルバイジャンの Z. M. Bunyatov によって刊行された。
- 10) ザンギー朝の Nūr al-Dīn やアイユーブ朝の Ṣalāḥ al-Dīn の書記を務めた 'Imād al-Dīn Iṣfahānī (519-97(1125-1201))の書いた歴史書 *Nuṣra al-Fatra* を縮約して623(1226)年にアイユーブ朝のディマシク領主 al-Malik al-Mu'azzam に献呈したのが al-Bundārī である。
- 11) Ibn al-Athīr は555年ジュマダー I 月 4 日(1160.5.13)に生まれ、630年シャアバーン月カラマダーン月(1233.5-6月)に没した。その主著 KT のうち本稿で使用したのは第 IX 巻及び第 X 巻である。
- 12) 588(1192)年にハラブで生まれ、660(1262)年にカーヒラで没した Ibn al-'Adīm はアラブの名門の出身で、当時のハラブの支配者、アイユーブ朝の al-Malik al-'Azīz, al-Malik al-Nāṣir に仕えた。彼の著作のうち、BT は歴史的にハラブに関わった人々のアリフ・バー・ター順の伝記辞典で、イスタンブル所在の10巻の写本は Fuat Sezgin によりファクシミリ版が刊行された。文献表の BT は元の写本から Sevim 教授がセルジューク朝関係の記事を抜粋校訂し、序言と内容摘要、解説を付して刊行したものである。Ibn al-'Adīm のもう一つの著作である ZH は641(1243)年までのハラブの町の歴史を記したもので、全文が校訂テキストとして出版されている。
- 13) Sibṭ ibn al-Jawzī は582(1186/7)年バグダードで生まれ、654年ズルヒッジャ月21日(1257.10.10)ディマシクで没した。彼はその名の通り、ハンバル派の大学者 Ibn al-Jawzī (597(1200)年没)の孫に当たる。彼の主著 MZ はその完全な写本がイスタンブルのトプカプ宮殿博物館の図書館に所蔵される(III Ahmet 2907/1-14)他にパリ(Bibliothèque Nationale 1506)やイスタンブルの Türk Islam Eserleri Müzesi(2141, 2134-5)にも写本が所蔵され、それらをもとにセルジューク朝関係の記事を Sevim 教授が抜粋校訂し、序言と共に刊行したものが文献表の MZ である。
- 14) Gardīzī は生没年不詳。その著作 ZA はガズナ朝のスルターン 'Abd al-Rashīd の時代(440-3(1049-52)年)に書かれた。内容は432(1041)年までのホラーサーンを中心とする歴史である。テキストは Nāzīm による部分的な校訂と Ḥabībī による全文の校訂の2種類のものがある。

- 15) 著名なイルハン国時代のワズィール、歴史家 Rashīd al-Dīn (718 (1318) 年没) の著作 JT にはセルジューク朝史に関する部分が含まれている。イスタンブールのトプカプ宮殿博物館の図書館所蔵の 3 写本 (Hazine 1653, 1654, Ahmet III 2935) をもとにセルジューク朝史に関する部分を Ahmed Ateş が校訂出版したものが文献表の JT である。Hazine 1654 写本の筆写完成は 717 年ジュマダー I 月 3 日 (1317.7.14) のことで、Rashīd al-Dīn Fadl Allāh の死の 1 年前に彼自身が書かせた写本であり、写本としての信頼性は極めて高い。尚、Ateş によればイランの太陽暦 1332 (1953) 年テヘラーンで刊行された Zāhīr al-Dīn Nīshāpūrī の *Saljūq Nāma* と称するテキストはその実 Rashīd al-Dīn Fadl Allāh のセルジューク朝史と同一のものであり、全く学問的な価値はないという [Ateş 1960 : 21-4]。筆者も両者の本稿に関連する部分を読み比べてみて Ateş の意見に全面的に同意する者である。
- 16) Ḥamd Allāh Mustawfī は 680 (1281/2) 年頃生まれ、740 (1339/40) 年以降に没した、イランのカズウィーン出身の人物で、ワズィール Rashīd al-Dīn の下でイルハン国の財務官僚を務めた。彼の歴史に関する主著 TG には Ibn al-Athīr (KT) や al-Baydawī (NT), Nizam al-Mulk (SM), さらに上述の今のところ作品が発見されていない Zāhīr al-Dīn Nīshāpūrī の *Saljūq Nāma* が利用されたことを彼自身が述べている [TG : 6-7]。
- 17) Shabānkārāī はイルハン Abū Sa'īd 時代 (717-36 (1317-36)) のワズィールで、Rashīd al-Dīn の息子、Ghiyāth al-Dīn Muḥammad に仕えた頌詩詩人である。733 (1332/3) 年に Ghiyāth al-Dīn に献呈した作品が MA であり、Ghiyāth al-Dīn の死後失われた作品を著者自身が 743 (1342/3) 年までに新たに書き直した自筆写本が現在ロシア連邦サンクト・ペテルブルク市の東洋学研究所に所蔵されている (c 372-1 (d, 566)) [Miklukho-Maklaj 1975 : 66-71]。別の写本がイスタンブールのスレイマニエ図書館にも所蔵され (Yeni Cami 909), それをもとにサフファール朝以後の部分を校訂刊行したテキストが文献表の MA である。スレイマニエ所蔵写本については岩武昭男氏所蔵のマイクロフィルムを利用させて頂いた。この写本には奥書がないが、Tauer の推定ではヒジラ 9 世紀のものである [Tauer 1931 : 96]。
- 18) ルームのアクサライ出身の Aqsarāī はイルハン国支配時代のルームに生きていた人物で *Tadhkira* または *Musāmarat al-Akhbār* という名の著作を残している。イスタンブールのスレイマニエ図書館に二つの写本が伝存しており、そのうち Ayasofya 3143 は 734 年ジュマダー I 月上旬 (1334.1.8-17), Yeni Cami 827 は 745 年シャッワール月 18 日 (1345.2.22) にそれぞれ筆写が完成されたものである。この二つの写本をもとに Osman Turan が校訂出版したテキストが文献表の MAA であり、二つの原写本についても筆者は 1989 年と 1991 年の 2 度にわたって現地で直接調査した。
- 19) セルジューク家の祖先 Duqāq がハザル出身であったのかという点についてトルコ共和国の Ibrahim Kafesoglu は「Duqāq はハザル王に服従する軍司令官ではなく、おそらくはオグズ国家の有力な bash-
bugh (指導者) の一人か、同盟軍を代表する者であった」と述べている [Kafesoglu 1988 : 23]。セルジューク家とハザルを結び付ける証拠は BT : 32/IV 552 の記事以外には他に全くなく、Kafesoglu のように解釈するのが妥当であろう。
- 20) Saljūq (Seljūk) が sū-bāshī というラカブを持っていたことについては Kāshgharī [DLT : 120 v], al-Ḥusaynī [ADS : 2/2 a], Ibn al-Athīr [KT : IX 474] にも同様の記事がある。al-Ḥusaynī, Ibn al-Athīr では共に sū-bāshī の意味は「軍司令官」(qā'id al-jaysh) である。

- 21) al-Ḥusaynī [ADS : 2-3/2 a] や al-Bundārī [TDS : 5] では Mikā'il がセルジューク家の首領としてガズナの Maḥmūd と関係を持った(al-Ḥusaynī では仕えていた) ことになっているが、セルジューク家の初期の歴史について比較的詳しい Ibn al-Athīr [KT : IX 474] には Mikā'il の事蹟は、聖戦して殉教したことしか記されていない。
- 22) セルジューク家がオグズ=トゥルクマーン族の筆頭(awwal), 中心(surra)である Qiniq 部族出身であることは Kāshgharī [DLT : 20 v] が明記している。
- 23) 著者不明のペルシア語の地理書 HA によれば「Dandānaqān は荒野(biyābān)の真ん中にある、その長さが500歩ほどの一城塞内の小さな町で、城外には隊商の宿营地がある」という [HA : 94/20 a-b]。al-Ḥusaynī はこの町の門で Chaghri bik 率いるセルジューク朝軍と Mas'ūd 軍が激戦したことを伝えている [ADS : 11-2/7 b-8 a]。戦いの日付は al-Ḥusaynī の記事を探った。
- 24) VN のトルコ語訳を行った Andreasyan によれば、この人物は生没年はじめ事蹟も殆ど不明で、作品が西暦1136年で終わるためこの年以後に没したことしか分からないとする。
- 25) Ghars al-Ni'ma の生涯と作品については [Sevim 1968 : 5-9] を参照。
- 26) Alp Arslān のニーシャープール発進は al-Ḥusaynī [ADS : 31/18 a] によれば456年ムハッラム月10日(1064.1.3)とされ、一方 Ibn al-Athīr [KT : X 36] は同年同月1日(1063.12.25)としている。Ibn al-'Adīm [BT : 37/IV 556] は、562(1167)年に没した *Dhayl Ta'riḥh Baghdād* の著者 Ibn al-Sam'ānī を情報源として Alp Arslān の勝利を455年ズルヒッジャ月のこととしており、Ghars al-Ni'ma による Sibṭ ibn al-Jawzī の記事と併せて筆者は Qutalmish の敗死を455年中のことと考える。
- 27) この人物の名をどのように読むのかは不明。Sevim 教授は Shōklū としているが [Sevim 1990 : 19, 24] その根拠やトルコ語の単語としての意味は示していない。
- 28) Atsiz はトゥルクマーンで、al-Nawakīya の頭目であり、465年シャッフル月(1073.6.10-7.8)にはエルサレムを征服した [MZ : 169]。
- 29) Sibṭ ibn al-Jawzī によればこの集団はスルターン「Alp Arslān の許から逃げた」集団であり、「ルーム地方へしばしば行き」やがて「シャームを制圧」したという [MZ : 153, 173]。467年シャアバーン月(1075.3.22-4.19)にはスルターン Malikshāh はその叔母の Gawhar Khātūn (Alp Arslān の姉妹)を殺害させたが、彼女は al-Nāwakīya 集団を率いる 'r.y.s.gh.y というトゥルク人の妻であり、Malikshāh のワズィール Nizām al-Mulk との間でかねてから借財の返済のことでめ事が起こっており、彼女は al-Nāwakīya に援助を求めたためアザルバイジャンに向かう途上で Nizām al-Mulk の差し金により殺害された [MZ : 173, 176]。一見すると、al-Nāwakīya は注28)の Atsiz や Gawhar Khātūn の夫がその頭目であったことからトゥルクマーンの一集団であったように思われるが、al-Nāwakīya についての記録を残す唯一のアラビア語史料である Sibṭ ibn al-Jawzī の記事の中に al-Nāwakīya が集団としてトゥルクマーンであることを直接に示す証拠は筆者の知る限り一つもない。Ateş は Turan の、al-Nāwakīya が Yawghiya (ヤブグ集団=元来 Isrā'il (Arslān Yabghū) 配下のトゥルクマーン集団)を示したものであるという説明 [Turan 1965 : 121-3] に対して、その説がアラビア文字の正書法上またトルコ語の音韻法則上誤りであることを実例を上げながら論証し、MZ に現れる al-Nāwakīya の語はペルシア語の yāwagiyyān (「元来国家の権威に従わず、または何らかの理由で、その権威から離れて、自由に動き回る、いつも移動状態にある部族または遊牧集団のこと」)に当たる単語であることを証明した

- [Ateş 1965 : 523]。筆者もかつて西暦1231年の最後のホラズムシャーフ Jalāl al-Dīn の死の前後の事情を検討した際 Rāwandī [RS : 331, 340, 399] を含む13世紀のペルシア語史料の中に yāwagī, yāwagīyān という単語を見いだし、正に Ateş の言う上記のような意味で用いられていることを確認した[井谷 1988 : 141-2, 注80]。その点では Ateş の説に賛意を表す。但し、問題は、13世紀のペルシア語表現と11世紀のアラビア語表現(MZ が書かれたのは13世紀だが、al-Nāwakiya が登場する文脈は11世紀)の間隙を文献的、歴史的にいかにも埋められるかであり、それが可能になれば、Ateş の説はより確かなものとなり、広く受け入れられるようになろう。現在のところはMZの校訂者 Sevim 教授等も依然として基本的には Turan 説を受け入れ、al-Nāwakiya はヤブグ集団または Yiva (Kāshgharī の表記では Ewā または Yewā で、オグズ第4の部族[DLT : 20 v])族のトゥルクマーンであるとする説明を続けている [Sevim 1990 : 19]。
- 30) シャームの各都市、特にハラブで11世紀に盛んに活動していたアフダースの事例研究としては [谷口 1990 : 87-96] が参考になる。
- 31) Anna Comnena (1083-1153/4頃) はビザンツ皇帝アレクシオス I 世コムネノスの娘で、父の時代の歴史を記録した Alexias 15巻を著した。文献表 Alexiad はその英訳である。
- 32) サトラブは古代ギリシア時代以来、東方(ペルシア)で征服地管理のために設置された官職号であり、古代の文化的伝統を引き継いで著作を行った Anna Comnena はおそらくアラビア語のアミールをこの語で呼んだのであろう。
- 33) Kāshgharī によれば、Bursumağ または Bursuq は「アナグマ」(duwayibba) のことで、オグズの人々 (al-Ghuzziya) はミームを落として Bursumağ を Bursuq と発音するという [DLT : 313 r]。
- 34) 最後に弓弦で絞殺されたという記述から、Abū al-Qāsim は或いはセルジユク家の血縁に連なるものであった可能性がある。但し、彼の名はイスラーム史料には一切現れないのでそれを確認することはできない。斬首などのように血を流さない絞殺は、セルジユク家の一族に適用された処刑方法であった。例えば13世紀の例では [井谷 1985 : 38] を参照。
- 35) Ibn al-Azraq al-Fāriqī によれば、499年にハーブル河で溺死した Qilich Arslān の棺はマイヤーファーリキーンに運ばれ、町に残っていた彼のアタベグで、父 Sulaymān のマムルークであった Khumārtāsh al-Sulaymānī がスルターンのクツバ (qubba = ドーム) として知られるクツバを建て、538 (1143/4) 年までそこに埋葬されていた。Qilich Arslān の子、Mas'ūd は父の棺をコニヤへ運ぶため人を送り、それはアーミドまで運ばれたが、この年ルームで反乱が起こったため棺はマイヤーファーリキーンへ戻って依然としてそこにあるという [TF : 273]。
- 36) Qutalmish と Sulaymān 父子の間に Ghāzī という人物がいたことは他のセルジユク朝関係の史料に現れないのは勿論、RS でも他にそれを示す記事は全くないので、例えば Sulaymān に付くガーズイー (聖戦の戦士) という称号が誤って挿入されたものであろうと推測される。
- 37) この「世界の主」(Khudāwand-i 'Ālam) という表現は「大セルジユク朝」のスルターン Alp Arslān, Malikshāh の2代にわたってワズィールを務めた Nizām al-Mulk が著した SM (別名を *Siyāsat Nāma*) の中で計21回用いられ、いずれの場合も Malikshāh のことを指している [SM : 5, 8, 11, 13, 16, 78, 116, 124, 126, 190, 199, 223, 224, 255, 256, 310, 312, 320, 326 (116, 320 では1頁に2度用いられる。)]。RS の中でこの表現が用いられる点にもルームのスルターン Kaykhusraw I 世を「大セルジユク朝」の

Malikshāh になぞらえようとする Rāwandī の意図を窺わせる。

文献表

<史料>

- ADS : al-Ḥusaynī, *Akhbār al-Dawla al-Saljūqiya*, (ed.) Muḥammad Iqbāl, Lahore, 1933.
 (写本のファクスイミリ版) (izdanie teksta) Z.M. Bunyatov, Moskwa, 1980.
- Alexiad : Anna Comnena, *Alexiad, being the history of the reign of her father Alexius I, Emperor of the Romans, 1081-1118 A.D.*, (trs.) Elizabeth A.S. Dawes, London, 1928.
- AQ : Qādī Burhān al-Dīn Abū Naṣr Anawī, *Anīs al-Qulūb*, Bakhsh-i Haftum, (yayınlayan) M. Fuad Köp-rülü, *Bell. Cilt VII, Sayı 27*, 1943, ss. 497-519.
- BT : Ibn al-ʿAdīm, *Bughya al-Ṭalab fī Taʾrīkh Ḥalab*, (yayınlayan) Ali Sevim, Ankara, 1976.
 (写本のファクスイミリ版) 10 Bde. Frankfurt am Main, 1986-9.
- DLT : Maḥmūd al-Kāshgharī, *Dīwān Lughāt al-Turk*, Ankara, 1990 (写本の原色刷りファクスイミリ版テキスト).
- HA : Anonymous, *Ḥudūd al-ʿĀlam*, (kūshish) Manūchihr Sutūda, Tih-rān, 1340.
 (写本のファクスイミリ版) rukopis' Tumanskogo, (vvedenie i ukazatel') V. Bartol'd, Leningrad, 1930.
- JT : Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh, *Jāmi' al-Tawārīkh*, II. Cilt, 5. Cuz, (yayınlayan) Ahmed Ateş, Ankara, 1960.
- KT : Ibn al-Athir, *al-Kāmil fī al-Taʾrīkh*, Vol. IX & X, (ed.) C.J. Tornberg, Bayrūt, 1979 (repr.).
- MA : Shabankāra'ī, *Majma' al-Ansāb*, (taṣhīh) Mīr Hāshim Muḥaddith, Tih-rān, 1363 (写本 : Yeni Cami 909).
- MAA : Aqsarā'ī, *Musāmamat al-Akhbār (Tadhkira)*, (tashih ve neşreden) Osman Turan, Ankara, 1944 (写本 : Ayasofya 3143, Yeni Cami 827).
- MM : Ibn Khurdādhbih, *al-Masālik wa al-Mamālik*, (ed.) M.J. De Goeje, Leiden, 1967 (repr.).
- MZ : Sibṭ ibn al-Jawzī, *Mir'āt al-Zamān fī Taʾrīkh al-A'yān*, (yayınlayan) Ali Sevim, Ankara, 1968.
- NT : Baydawī, *Nizām al-Tawārīkh* (写本 : Ayasofya 3605).
- RS : Rāwandī, *Rāhat al-Şudūr wa Āyat al-Surūr*, (ed.) Muḥammad Iqbāl, Leyden & London, 1921.
- SM : Nizām al-Mulk, *Siyar al-Mulūk*, (ed.) Herbert Darke, Tih-rān, 2535 Sh. (chāp-i siwwum).
- TA : 'Azīmī, *Taʾrīkh*, (yayınlayan) Ali Sevim, Ankara, 1988.
- TDS : Bundarī, *Taʾrīkh Dawla al-Saljūq*, Misr, 1318=1900.
- TF : Ibn al-Azraq al-Fariqī, *Taʾrīkh al-Fariqī*, (ḥaqqaqahu wa qaddamahu) Badawī 'Abd al-Latif 'Awaḍ, Bayrut, 1974 (repr.).
- TG : Ḥamd Allāh Mustawfī, *Tārīkh-i Guzīda*, (ihtimām) 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī, Tih-rān, 1362 (chāp-i duwwum).
- VN : Urfali Mateos, *Vekayi-Namesi(952-1136) ve Papaz Grigor'un Zeyli(1136-62)*, (Türkçeye çeviren) Hrant D. Andreasyan, Ankara, 1987 (2 nci baskı).
- ZA : Gardizī, *Zayn al-Akhbār*, (ed.) Muḥammad Nāzīm, Berlin, 1928,
 (taṣhīh) 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Tih-rān, 1363.

ZH : Ibn al-'Adīm, *Zubda al-Ḥalab min Ta'rīkh Ḥalab*, al-Juz' al-Thānī, ('uniya bi-nashrihi) Sāmī al-Dahhān, Damas, 1954.

<参考文献>

Ates, Ahmed

1960 Cāmi' al-Tavārīh'in Selçuklulara dair Bölümü (Giris to JT), Ankara.

1965 Yabğulular Meselesi, *Bell. Cilt XXIX*, Sayı 115, ss.517-25.

Hillenbrand, Carole

1990 *A Muslim principality in Crusader time .The early Artuqid state*, Leiden.

Iqbāl, Muḥammad

1921 Preface to RS, Leyden & London.

1933 Preface to ADS, Lahore.

Kafesoğlu, Ibrahim

1988 *A history of the Seljuks*, (trs.) Gary Leiser, Southern Illinois University Press.

Miklukho-Maklaj, Nikolaj Dmitrievich.

1975 *Opisanie Persidskikh i Tadjikskikh rukopisej Instituta Vostokovedeniya*, Vypusk 3, Moskwa.

Sevim, Ali

1969 Giriş to MZ, Ankara.

1988 Giriş to TA, Ankara.

1990 *Anadolu Fatihî Kutalmışoğlu Süleymanşah*, Ankara.

Tauer, Felix

1931 Les manuscrits Persans historiques des bibliothèques de Stamboul, *ArOr* Vol.III, No.1, pp.87-118.

Turan, Osman

1965 *Selçüklular Tarihi ve Türk-Islam Medeniyeti*, Ankara.

井谷鋼造

1985 イルハン国とルーム, 『イスラム世界』, 23・24, pp.34-54.

1988 ルーム・サルタナトとホラズムシャー, 『東洋史研究』, 47-1, pp.116-49.

清水宏祐

1975 イブラーヒーム・イナルとイナリヤーン, 『イスラム世界』, 10, pp.15-32.

谷口淳一

1990 11世紀のハラブにおけるカルアとマディーナ, 『東洋史研究』, 49-2, pp.70-106.

本田実信

1991 『モンゴル時代史研究』, 東京大学出版会.

(追手門学院大学文学部)